

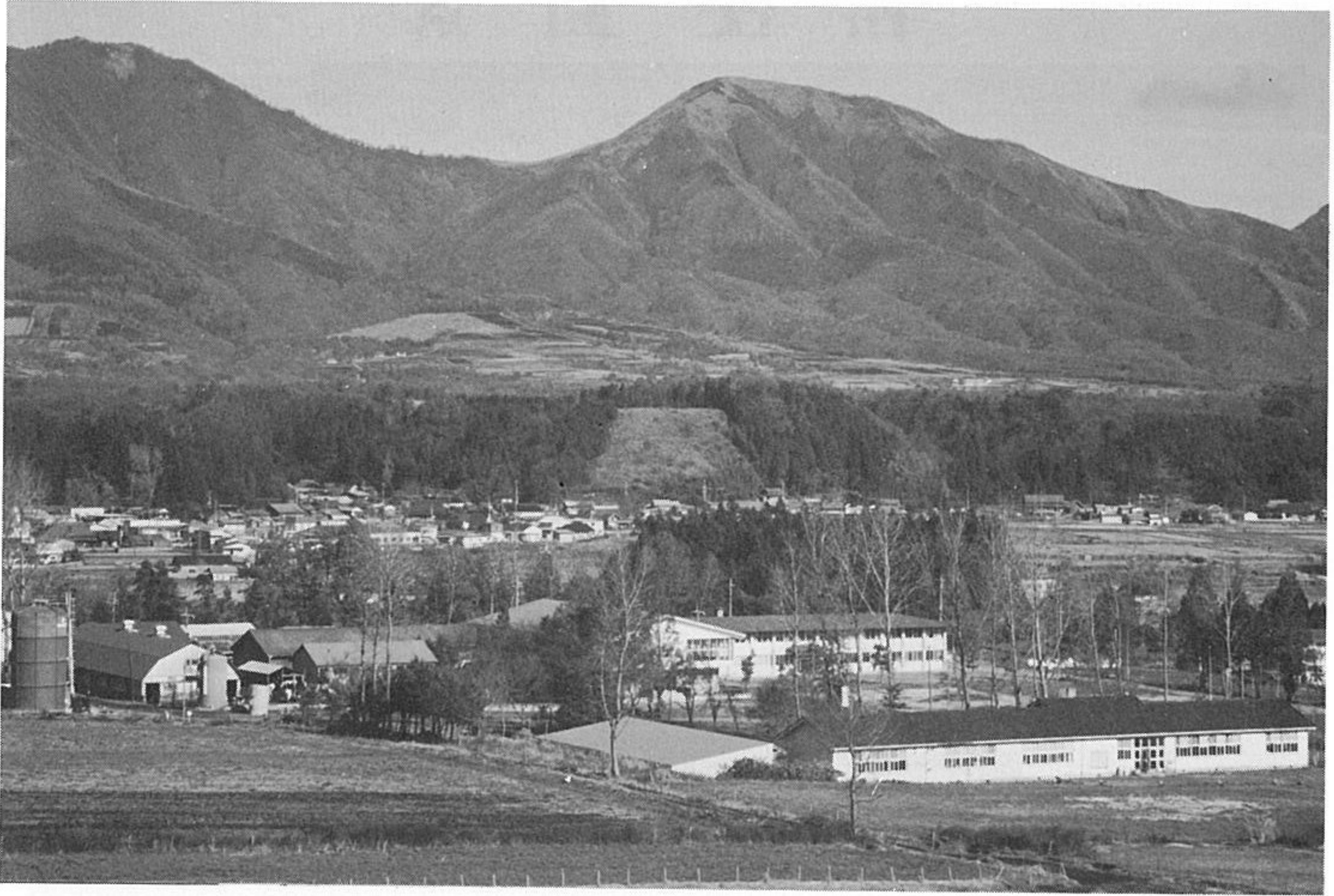
財団法人中国四国酪農大学校創立20周年記念

# 20年のあゆみ

昭和60年11月

財団  
法人

中国四国酪農大学校



第一牧場全景

## 校歌

作詞  
作曲 水野康孝

一、蒜山の野の涯遠く

仰げば高し大山や

見よ紺碧の空のもと

旗ひるがえすわが母校

二、平和の鐘の鳴り出づる

若き世代の朝ぼらけ

希望燃え立つ酪農の

道はわれらと共にあり

三、くれない燃ゆる頬をあげて

力のかぎり逞ましく

行けやわが友若人よ

栄光永久に輝やかに

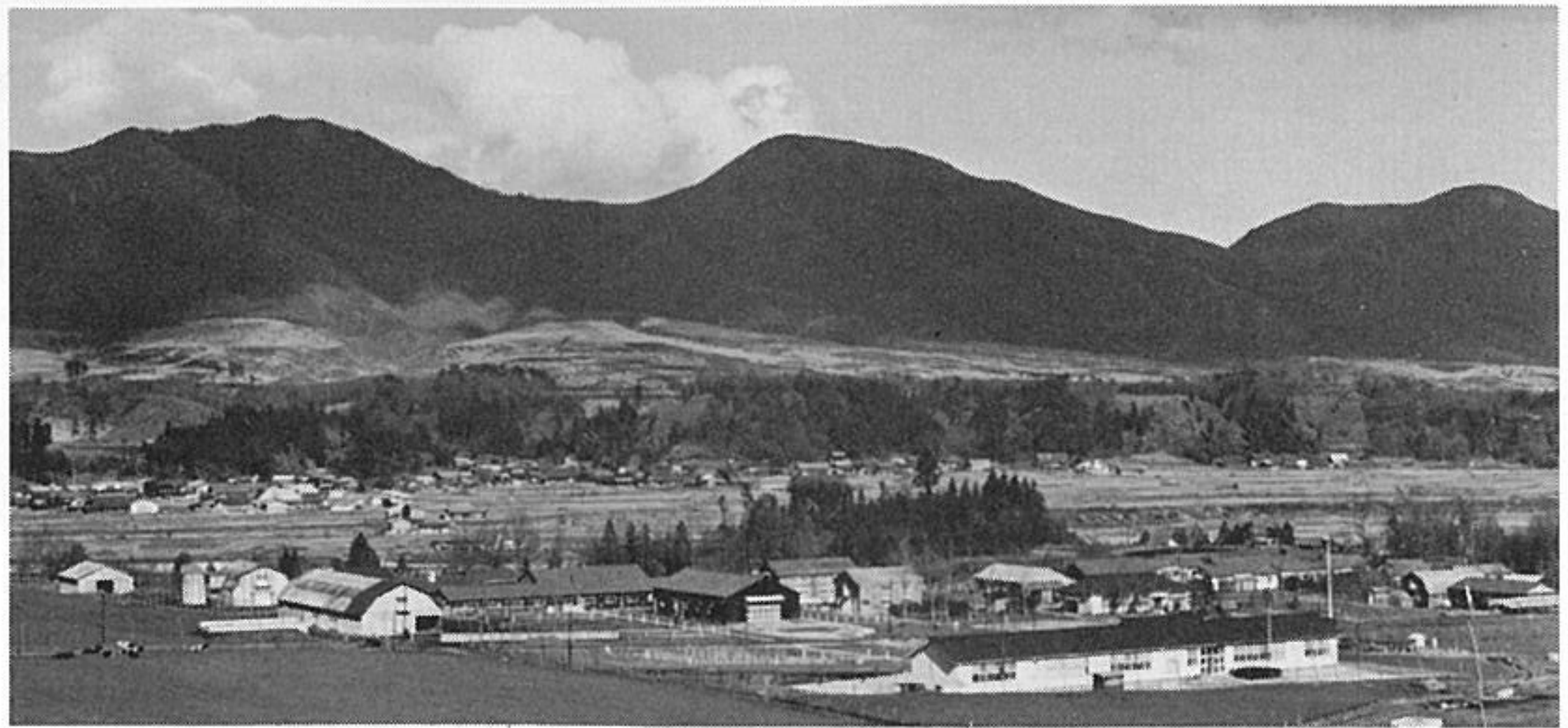
輝やかに



# 学 校 全 景



昭和59年 2月の本校  
第1牧場(西茅部)



昭和42年当時の本校・  
第1牧場(西茅部)



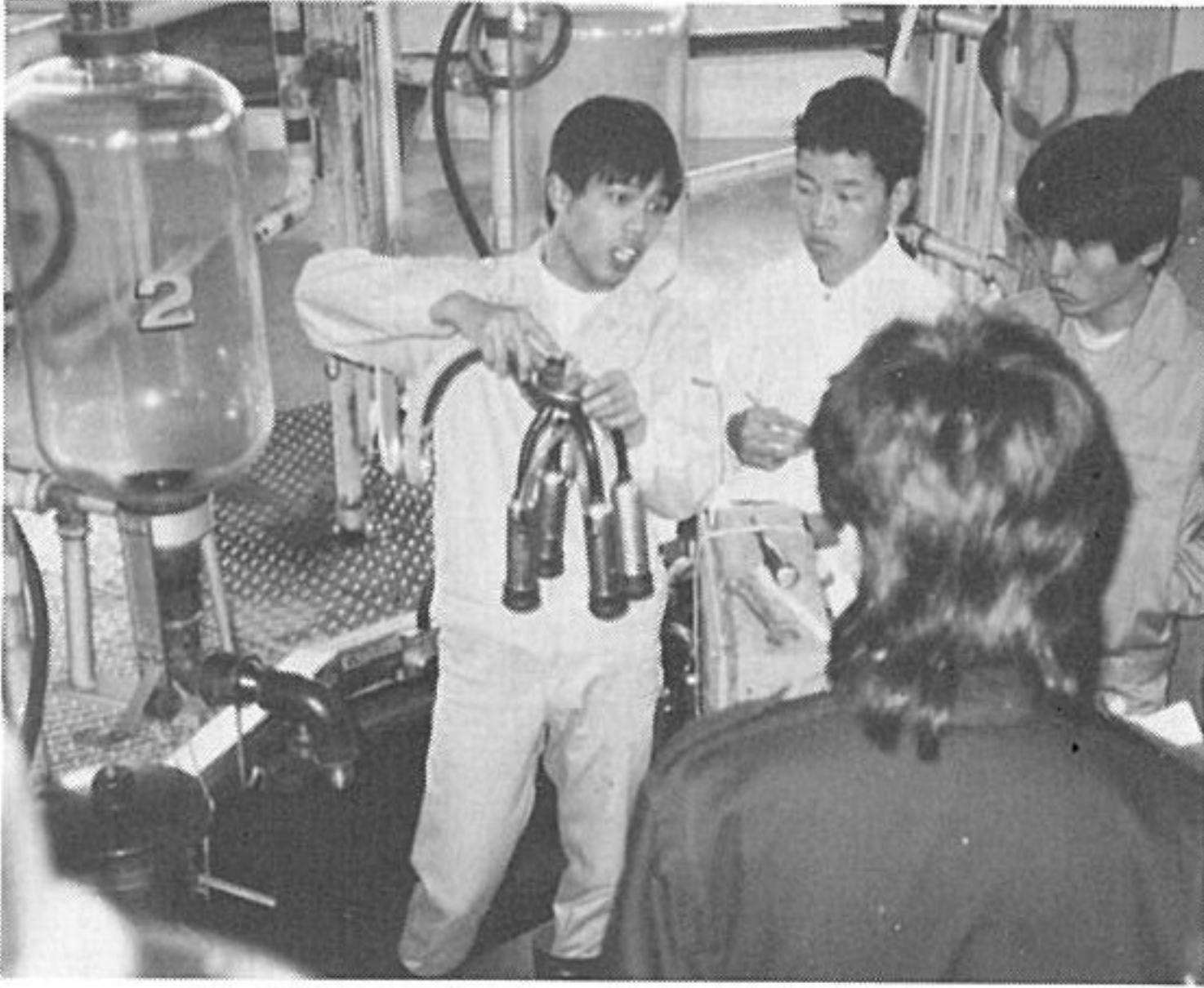
昭和60年10月の第2牧場  
(三木ヶ原)



昭和39年当時の第2牧場  
(三木ヶ原)



# 学 園 生 活



搾乳演習 (ロータリーパーラー)



牧場実習



農業機械実習 (青刈)



牧草・飼料作物演習

食 堂



女 子 寮



男 子 寮



## 目 次

ごあいさつ	(助)中国四国酪農大 理事長	長野 士郎	1
発刊にあたって	(助)中国四国酪農大 校長	石田 正之	2
祝 辞	中国四国農政局長	國廣 安彦	3
祝 辞	岡山県真庭郡川上村長	佐藤 守	5
現 役 員			7
歴代校長・副校長			8
想 い 出			
県立酪農大 創立時の思い出の記	元教務課長	花尾 省治	9
酪農大 学校と私	元経営部長	竹原 宏	11
蒜山の思い出	元校長	花田 時太	12
創立二十周年に想う	元副校長	永井 仁	13
想い出	第一期生	繁田 寿夫	14
酪大時代の想い出	第四期生	遠藤 祐史	15
酪大創立二十周年記念に寄せて	第七期生	三好 正文	16
酪農大 学校の想い出	第十四期生	平野 耕平	17
先人の軌跡			
「これからの酪農」	元校長	惣津 律士	19
「苦心惨胆中国四国酪農大 学校の発起」	元岡山県農林部長	山下 肅郎	21
学校の沿革			
写真でつづる二十年			24
校外講師一覧表			30
学科目担当講師名簿			31
現職員名簿			32
旧職員名簿			34
出身県別卒業生及び在校生の状況			38
卒業生名簿			40
(助)中国四国酪農大 創立二十周年記念事業			70



## ごあいさつ



(財)中国四国酪農高等学校

理事長 長野 士郎

昭和四十年十一月、(財)中国四国酪農高等学校が創立され、今年で満二十周年を迎えました。

ここに、永年にわたって本校の育成強化にご尽力を賜わった関係機関ならびに各位に深甚の謝意を表する次第であります。

創立当時は、全国的にも酪農に対する向上意識が高く、乳牛飼養頭数の増頭による、生乳増産が至上課題であり、栄養食品として国民の食生活の改善による健康向上に大きな期待が寄せられておりました。

このような時代背景のもと、(財)中国四国酪農高等学校は、企業的経営をめざした、酪農経営者および後継者を育成することを目的として創立され、今日まで関係者の期待にこたえてまいったのであります。

この間、我が国の酪農は急速な牛乳・乳製品の消費拡大にともなって目覚ましい発展を遂げてまいりましたが、昭和

五十四年を境に生乳需給に不均衡を生じ、酪農経営は計画生産を余儀なくされており、牛乳消費の伸び悩みの中で、種々問題を生じております。

このため、従来の規模拡大による量的拡大から、乳牛能力の改良、飼料自給率の向上等による経営改善、また、良質乳の安定的生産等を中心とした質的充実への転換が強く求められております。

このような時、本校といたしましては、酪農近代化計画を基本に長期展望に立って、諸外国に太刀打ちできる足腰の強い酪農経営を営むため、高度な技術技能を身につけた酪農経営士の育成が今後とも重要な課題であります。

本校創立以来、今日まで六四五名の卒業生を送り出し、微力ながら酪農経営の安定的発展に寄与してまいりましたが、今、昼夜をとわず酪農発展のために尽力された先人たちの数々の輝かしい業績を思いおこし、その御労苦に対する感謝致す次第でございます。今後、本校を一層発展させていくことが、私どもの先人に対する報恩であり、責務であると思っておりますので、どうか今後とも皆様方の特段のご援助ご協力をお願い申し上げ、ご挨拶といたします。



## 発刊にあたって



(財)中国四国酪農大 校長

石田正之

財団法人中国四国酪農大 校長

昭和四十年十一月に、企業としての酪農経営技術を習得させる目的で、中国四国および兵庫県の十県を対象として設立認可されて以来、二十年を経過するに至りました。

この間、国、岡山県を始めとする組織県、および地方競馬全国協会、ならびに関係各位のたえまないご指導、ご援助によりまして、年々施設の充実と、数多くの卒業生を送り出すことが出来ましたことを、ここにあらためてお礼申し上げます。

現在までに、本校の卒業生は五六一名で、県立時代を含めると六四五名の多数の卒業生を送り出し、その約八〇%の者が酪農自営者として、各地域での酪農の中核的リーダーとなって活躍しておりますことは、まことに喜ばしくご同慶にたえません。

このたびの創立二十周年記念行事の一環として、二十年

間にわたる本校の足跡を振り返り、これからの酪農教育の在り方を考えることは大変有意義なことと思ひ、この記念誌の発刊を思い立ったのであります。

二十年の歴史を語る前に忘れてならないのが、本校の前身であります岡山県立酪農大のことで、わずかな期間ではありましたが、今日の本校の礎の役割をはたしている重要な意味を持っていると思ひます。

初代校長の故惣津氏を始めとする先輩職員の方々の、日夜をわかたぬ努力が、今日の本校の基礎となっていることは誰も疑問をはさむものではありません。その意味を考へて、本校の歴史の頁として記念誌の中を飾ることといたしました。

現在のわが酪農の現状と将来の展望をみると、今後一層酪農経営者の教育が重要になることが考えられます。

今後とも、当大職員一丸となって、課せられた使命を果すべく努力いたす所存でございますので、一層のご指導、ご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

今回の記念行事に多大のご協力を賜わりました関係各位に対し、深甚なる敬意を表し、発刊のことばといたします。



## 祝 辞

中国四国農政局長

國 廣 安 彦

財)中国四国酪農大が、この度記念すべき創立二十周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

顧みますと、本校は、昭和四十年に岡山県立酪農大から、(財)中国四国酪農大に改組されて以来今日まで、蒜山麓の広大な自然に囲まれた環境の中で、実践的教育を理念に、近代的な酪農経営と、広範な科学技術の教育を進めてこられました。

この間、五百六十余名の優れた人材を送り出され、その方々は、それぞれの地域において、よき地域リーダーとして活躍され、酪農の発展、向上に多大の貢献をされておりますことは、誠に御同慶の至りであります。

さて、一口に二十年と申しましては奇もないかも知れませんが、その間の酪農の変遷は大変なものであります。

昭和四十年には農業の選択的拡大の重要作目として位置

づけられ、酪農の将来展望と対策の方向が示されることとなり、加工原料乳生産者補給金等暫定措置法(不足払い法)が公布され(四十一年四月一日施行)、同時に酪農振興法及び土地改良法の一部改正、農地開発機械公団法(現農用地開発公団法)の一部改正(いわゆる酪農三法)も公布され、総合的に酪農振興が図られることとなりました。

また一方、四十四年からは米の過剰問題が生じ、四十六年から本格的な米の生産調整を実施することとなり、稲作から他の作物に、とりわけ飼料作物への転作が推進されました。

このことから四十六年の乳用牛飼養頭数は一八五万六千頭となり、四十七年の生乳生産量も四九四万トンとなり、いずれも、それまでの最高を記録する程となりました。しかし、四十年後半に入ると、環境汚染問題に関する意識の高まりとともに、オイルショック等による購入飼料等生産資材価格、労賃及び地価等の高騰など酪農経営は構造的危機に陥り、四十八年、四十九年は、共に前年水準を下回る状況となりました。このため、五十年代に入り配合飼料価格安定特別基金(現配合飼料供給安定機構)を発足させるなど、国際価格の変動に対応した、配合飼料価格の安定を図る体制が確立されました。

しかしながらその後の配合飼料価格が大きく下落したこ



と等から、経営は安定したものの生乳の生産量は需要を大きく上回ることとなりました。

最近では、経済の安定成長への移行等により畜産物の需要が伸びなやむ一方、生産能力の増大により、多くの部門で、供給過剰となり易い構造となっております。これは、酪農についても例外ではなく、五十四年度以降、需要の動向に即した計画的生産が実施されることとなり、今後とも、その推進が必要となっております。したがって今後の酪農経営の安定を図るためには、経営の質的改善を図るとともに草地基盤に立脚した足腰の強い経営体質が強く望まれるところであります。また、国内の牛肉生産の七割を乳用種で占めているなど、酪農と肉用牛経営との関連が益々密接となっていることからみて、乳肉複合経営等による経営の安定的発展も重要な課題と思われれます。

このためには、時代に即応した新しい技術と経営感覚で、次の時代を開拓する若い経営者の養成、いわゆる「人づくり」が重要と考えます。やがて、この人達が地域のリーダーとして「むらづくり」に、また、酪農を通じて「土づくり」にと活躍され、我が国農業振興の基本理念であります「人づくり」「むらづくり」「土づくり」の礎となると信じています。

今後とも、この二十年間に蓄積された伝統である明るい

校風のもとで、逞ましい学生諸君の研鑽により、我が国酪農の発展のため、大きく貢献されることを併せて、中国四国酪農大の御発展を心から祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。



## 祝 辞



岡山県真庭郡川上村長

佐藤 守

校創立二十周年を迎えられ、ここに記念式典を挙行されるに  
当たり地元蒜山の村民に代りお祝いの言葉を申し上げます。

貴校は、昭和四十年十一月県立酪農大学校から大きく発  
展飛躍され、(財)中国四国酪農大学校として改組開校され、  
我が国でも数少ない近代的酪農経営能力を身につける特殊  
教育機関として発足以来、早くも二十年の歴史を切り拓い  
てこられたのであります。

創設期始めの昭和四十二年早春には、大学校内での天皇  
皇后両陛下の第十八回植樹祭お手播き行事が行なわれ、学  
生と共にジャージー牛を供覧され、次いで四十三年には第  
一回全日本ジャージー大会が川上村で開催され、貴校の多  
大の御協力をいただいたところであり、この様な大きな行  
事をよく克服され努力された歴代校長を始め教職員各位の  
御苦勞に対し、深く敬意を表する次第であります。特に終

始一貫した堅実な教育目標を堅持され、酪農という特色の  
ある校風を樹立され、また地方競馬益金事業等により体育  
館を始め男子寮、女子寮、研究室等諸施設の整備充実を図  
り、学園の面目を一新し、隆々たる校運を実現されたので  
あります。

今日まで酪農経営士として卒業された数多くの皆さんは、  
貴校において修得された酪農に関する巾広い科学技術と牧  
場において流汗額にした実践的酪農技術を生かし、きびし  
い酪農界を切り拓き活躍されていることと存じます。

今や国際化、情報化、技術革新の進展など新しい時代、  
そして、大きな社会経済の変化が予測されています。この  
時代にふさわしい人間性の向上と能力の開発が叫ばれてい  
る現今、二十一世紀を築く新しい酪農教育が要請されると  
き、貴校へ期待される大きなものを感じます。

昭和六十三年瀬戸大橋の供用開始、岡山新空港の開港に  
つづき、中・四国地方も中国横断自動車道の開通と高速交  
通網時代を迎えんとしています。岡山県も「燃える岡山」の県  
民運動が幅広い分野で展開されており、今燃える時代であ  
ります。

創立二十周年を記念して本式典を挙行せられ、輝かしい  
伝統を顧みながら将来の酪農大学校の発展を期せられるこ  
とは極めて意義深い慶事であり、まことに目出度く、心



よりお祝い申し上げます。

どうか今後とも全校一致の御努力と関係各県の御協力により、本校が益々隆盛なる前途を開拓され、本日の二十周年の式典をして真に光彩あらしめられるよう、また、歴史と伝統に立って本校の校歌に歌われておりますよう『若き世代の朝ぼらけ望み、燃え立つ酪農の道は我らと共にあり』のように燃え立つ酪農教育に専念され、一層の発展を遂げられます様念願いたし、併せて校長をはじめ教職員各位の御健勝をお祈りいたしましてお祝いの言葉といたします。



# 現 役 員

(昭和60年11月現在)

役職名	氏 名	所属団体及び職名
理事長	長野 士郎	岡山県 知事
理事	薬師寺 理助	岡山県 農林部長
〃	石田 正之	(財)中国四国酪農大 校長
〃	深井 辰三	兵庫県 農林水産部長
〃	西尾 迢富	鳥取県 農林水産部長
〃	高木 賢	島根県 農林水産部長
〃	野中 和雄	広島県 農政部長
〃	栗屋 芳信	山口県 農林部長
〃	佐藤 栄一	香川県 農林部長
〃	近藤 通弘	徳島県 農林水産部長
〃	黒田 康典	愛媛県 農林水産部長
〃	岡林 章夫	高知県 農林水産部長
監事	石倉 崇	島根県 農林水産部次長
〃	坂井 八郎	高知県 農林水産部副部長



# 歴代校長・副校長

4代  田渕志郎 (S 49.4~51.4)	3代  金島卓司 (S 48.4~49.3)	2代  花田時太 (S 42.5~48.3)	(財団) 初代  蔵知毅 (S 38.4~42.5)	(県立) 初代  惣津律士 (S 36.12~38.3)	校長          副校長
 永井仁 (S 48.4~53.3)					

10代  石田正之 (S 59.4~現在)	9代  三村剛 (S 57.4~59.3)	8代  宮本宣明 (S 55.12~57.3)	7代  三宅茂 (S 54.7~55.12)	6代  花房清人 (S 53.4~54.7)	5代  信江茂 (S 51.6~53.3)	校長          副校長
		 服部剛 (S 55.4~57.3)	 竹内秀雄 (S 53.4~55.3)	 永井仁 (S 48.4~53.3)		



# 想　い　出

## 県立酪農大学校創立時の思い出の記



花尾 省 治

(昭和36年12月～38年3月「教務課長」)

岡山県立酪農大学校創立の思い出について述べたいと思います。戦後の蒜山は、冬は積雪にうもれ、夏になると砂塵を吹きあげる曲りくねった山道を小型バスにゆられながら長い時間をかけてやっとのおもいで、たどり着いたものでした。当時、生活をささえるものは、米・黒牛・馬・タバコ位のもので、わびしい寒村で、従って農家経済は、低いものでした。この蒜山を陽のあたる場所にしようとして、偉大な時の指導者・故三木知事と情熱の人・故惣津畜産課長のお二人が国を動かし、ジャーシー牛導入の指定にこぎつけたのでした。昭和二十九年秋、川上・八束・中和・二川・湯原の五カ町村に黒牛しか見たことのなかった村に、可愛いバンビのような乳牛が導入されました。続いて、昭和三十年十二月、一市十五カ町村が「美作集約酪農」国の指定となって「乳の流れる里」蒜山高原建設に向けて挙県一致体制がひかれ、指導体制の整備、営農改善、飼養管理、五千ヘクタールに及ぶ原野の草地造成に向けて（美作地域大規模草地改良事業）トラクターのエンジンの響きも高く草原の開墾が進められました。大規模草地は三十四年秋から調査が始められ、事業実施は三十六年からでした。

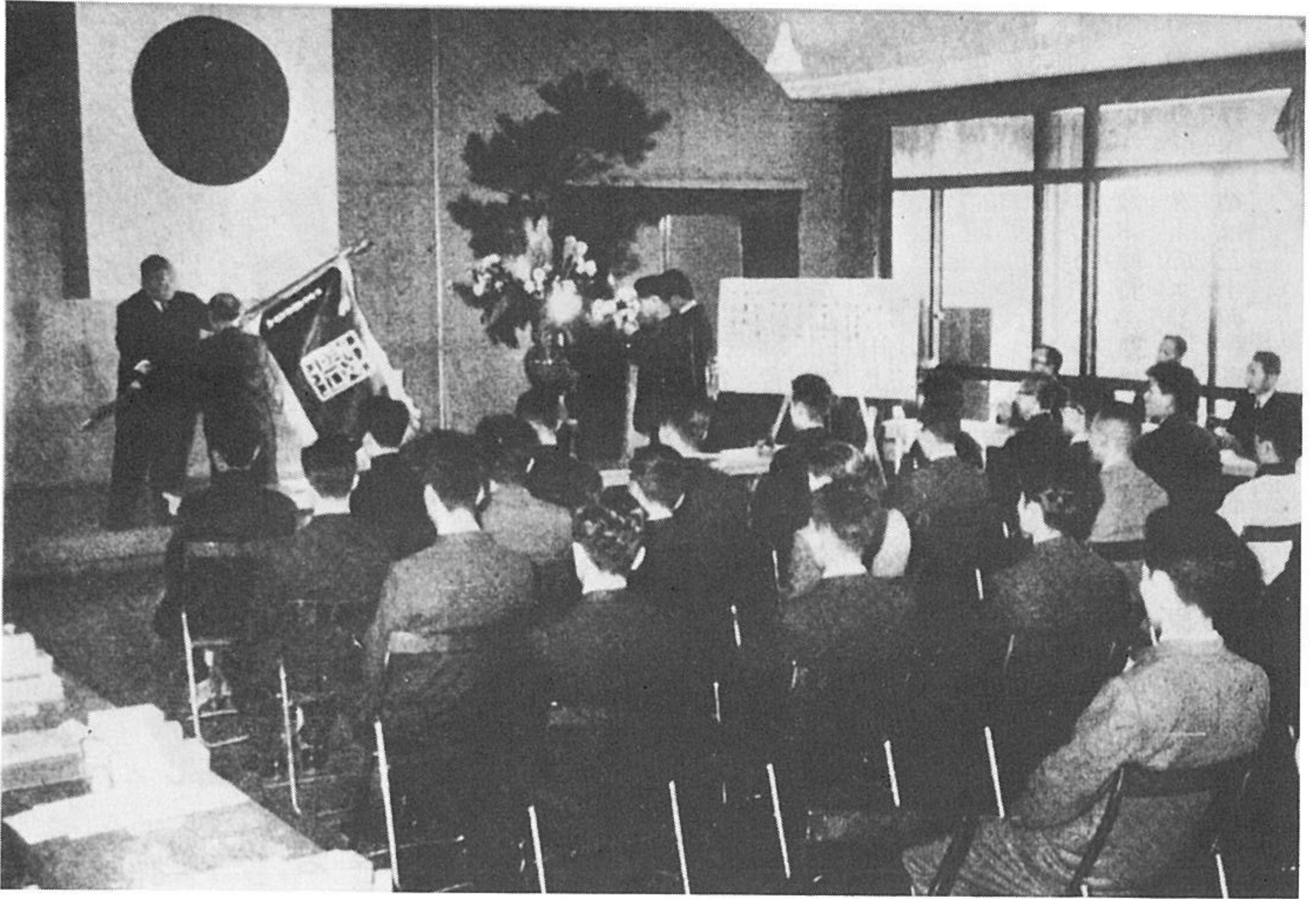
ところで県立酪農大学校の建設は、三木県政「酪農振興」の一環として昭和三十六年十二月一日の開校となり、初代校長には本県の酪農建設に情熱を燃やされた惣津律士農林部次長に白羽の矢がたてられ、就任されました。入学式は十二月一日午前九時から県庁九階ホールで、三木知事をはじめ、三十名の第一期生（うち、県内二十六名）、関係者百数十名が出席して行われました。知事からは「酪農によせる県民の期待は大きい。今後も酪農振興には力を入れてゆきたい。惣津校長のもとにより校風を作ってほしい」と、熱のこもった告示がありました。続いて知事の手から惣津校長の手にしっかりと校旗が手渡されました。更に入学生の宣誓署名が行われ、厳粛のうちに希望に満ちた入学式典は終わりました。その時の情景は、今も睨に焼きついています。

或る日突然、部長室から呼び出しがかかり、当時、部長・次長は同室でしたお二人の前で「お前、惣津校長の補佐役として酪大にゆかぬか」と言われ、一時ためらったものの惣津校長の下でのご奉公であり了承いたしました。

新入生の授業は十二月十日から三月末までが第一期となっていました。蒜山原に建設中の校舎ができるまでの間、津山市の県立酪農試験場の一部を間借りして一期生四カ月の授業実習を行いました。専任職としては私の他に、三秋尚飼料研究主任、事務担当は小谷哲夫主事補だけのこじんまりしたメンバーでのスタートでした。二期生から本格的に蒜山の新校舎で授業実施となりました。

思い出の二／三を取りあげてみますと、①新校舎移転の年は古老もびっくりする程の三十年來にない程の大雪に見まわれ、一時交通麻痺の状態で食糧不足となり、二米余の雪を除いてのカンラン掘り出し、牛の藁不足で近くの農家の藁を買い取り、慣れないスキーでの藁運び、②今、亭々と天に向かって伸びているポプラ並木は、職員の方達が食





県立酪農大学校の開校式 校旗授与

前作業で苗木をスコップの長さと同じ深さに掘り、一本一本丁寧に汗流して植えたものです。③三木ヶ原での種まきは、学生・先生が横一列に並び、縄を適当の間隔に各自の腰に結び、号令一下一斉に前進、種を散布しました。④「土地の譲り受け交渉」学校入口の畑はタバコ耕作畑の一等地でしたが、これを求めて入口から学校の土地にするため、三秋主任が夜毎交渉を続け、やっと買収の手打ちとなりました。数々の先生方の苦心話はつきません。

「歴史は、人によって作られ、人は教育による」といわれます。初代惣津校長は、よき行政官であったと同時に、立派な教育者でした。その高邁な人格、先見性、情熱の持ち主だった校長の人間像に先生も学生も心ひかれ、両者が混然一体となって校風づくりに励みました。惣津校長によって点火された輝やかしい聖火を永遠に光り輝やくものとしてほしいと願って止みません。終わりに一層の発展を祈ります。



## 酪農大と私



竹原 宏

昭和37年4月～41年3月 飼養研究室主任  
昭和41年4月～43年5月 経営部長

私は昭和三十七年四月に県立酪農大の飼養研究室主任として、単身赴任した。その後四十一年から財団の業務を担当し、四十二年四月に転出したがこの五年間に、短い期間であったが、天皇、皇后両陛下の行幸啓、皇太子殿下の行啓、県立、財団の牧場建設、ニュージールランドの出張、等大きな行事が続き多忙な毎日であった。今から想うと私の人生で最も充実した時期であり、苦闘の時期でもあった。

### ○建設時代（県立時代）

私の着任の頃の蒜山は、今日のように観光開発が進められてなく、僻地で暗くて寒かった。着任した三十八年の冬は豪雪であった。私達（惣津律士、花尾省治、三秋尚、神野一雄、花房猛の諸先生と私）は県南のそでちで、この豪雪には肝を冷やしてしまった。積雪は数メートルに達し、電線は手が届く程に垂れ下がった。事務所、食堂、公舎の間の通路を踏みはずすと胸まで埋もれることもあった。公舎はすっぽりと雪が覆い、帰宅すると、まるで冷蔵庫の中に入るように寒かった。当時は石油ストーブも普及しておらず、八〇〇ワットの電気ストーブで手をかざす程度であった。風呂は寒い冬の一歩の楽しみであったが、薪が湿ってなかなか燃えつかなくて苦労した。

その頃の蒜山の主な産物は、米、タバコ、和牛で、多労のうえ収入

に恵まれず、しかもこれらはすべて手作業で重労働であった。当地には採草地が多く、一日二回草刈りに出かけた。これは二段刈りと呼ばれ、年間一〇〇日も続けられた。このため労働過重と栄養不足のため神経痛、クル病が多く、幼児の死亡率も高かった。現在のようにレストランやコーヒーショップが軒を連ね、ジャージー牛乳、チーズ、ワイン、大根等の数多くの特産物をもつ桃源境など夢想もできなかった。

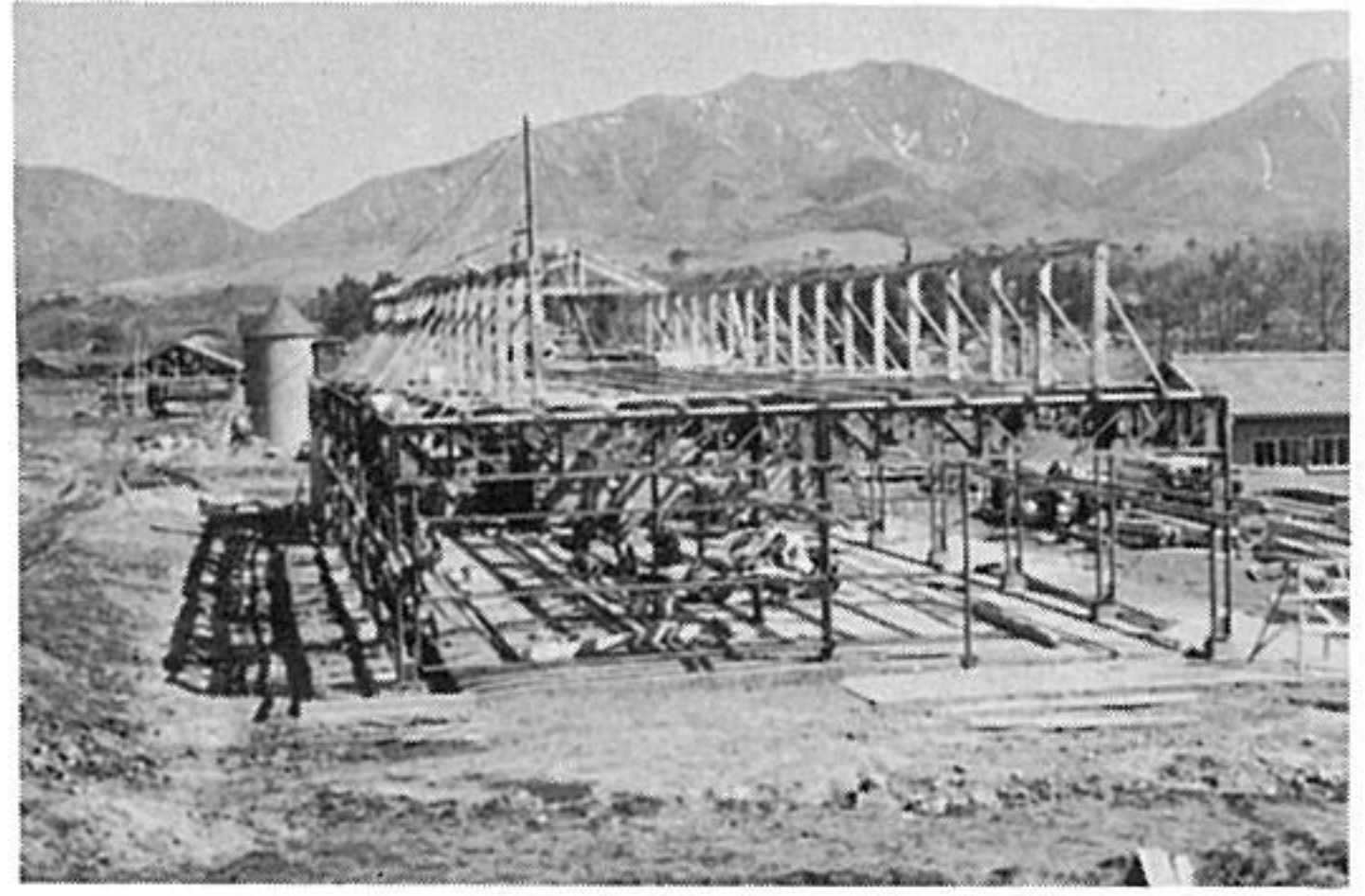
### ○牧草造り

昭和三十六年頃、全国的に解放牛舎（ルーズバーン）が流行していた。ジャージー種は群飼に適した品種ということもあって、県立酪農大にもサイドオープン型型のミルクパーラーを備えたルーズバーンが建設され、二十六頭のジャージー牛が飼養された（写真参照・第一牧場牛舎の建設）。天野省吾、谷名光朗、美土路啓典の諸先生のご努力で大変うまく運営された。またアメリカ号、ロードボランティア号等優美な体型の牛もいたので、酪農のメッカに相応した牧場となっていた。その最中の昭和四十年八月三日に皇太子殿下を迎え、整然とご覧いただいた。ちょうど、この頃から中四酪大の建設計画が企画され、補助金を受ける地方競馬全国協会の意見に従って、日本的な三十頭前後の牧場を三つ造ることに決定し、第一牧場はホルスタインの刈取給与、第二牧場はホルスタインの放牧、第三牧場はジャージー種の放牧とそれぞれの牧場が異なったスタイルで運営されることになった。これは私達に色々なことを教えてくれた。ホルスタインの放牧形態は大変難しく、生産性が低くなることばかりだったため、第二牧場はジャージー牛に転換した。

### ○愛染かつら

県立当時の惣津校長の指導方針が生徒との対話であった。夜学生が公舎に来て、遅くまで酪農の話をして帰った。冬が近くなると薪割り





第1 牧場牛舎の建設

をしてくれたこともある。今も忘れられない大変うれしかったことがある。中福田の福田神社の前に、当時古ぼけた芝居小屋があった。そこで戦中の「愛染かつら」が上映されることになった。夏だったと思うが、暗くならないと上映出来ないで、夕方私も出かけた。名画ということで、満員であった。入口であきらめて帰ろうかなと思っていたところを、中の学生に見つかった。学生がたくさん入っていたため、私はとうとう最前列に押し出された。少し恥ずかしかったが、はじめて先生の冥利というものを味わった。眼の内側が熱くなった。

## 蒜山の思い出



花田 時 太

(昭和42年5月～48年3月 11 校長)

(財)酪農大創立二十周年を迎え、誠にお目出度うございます。

大卒生が今や数百名にのぼり、その大多数の者が、自営者と

して、あるいはまた、指導者として酪農推進に目覚ましい活躍を続けていることを見るにつけ、聞くにつけ、大変頼もしく、また嬉ばしく思います。

私は、酪農大が県立から財団法人に移行した昭和四十二年五月に赴任し、数年間を蒜山で過ごしましたが、実は蒜山を訪れたのは二回目で、最初は今から四十年以上も前のことになりました。昭和十九年軍隊で岡山から蒜山原演習場に着き、そこで数カ月を過ごしました。当時軍の廠舎は現在の蒜山高校のある場所で、その時は伯備線江尾駅から二十軒の道程を徒歩でくたになってたどりつきましたが、重い装備を身につけての行軍で、廠舎に着いたとたん倒れる者も何人かいました。ここで数カ月間、毎日がきびしい演習の連続で、あのくろぼこ原野をはい廻ったり、旭川の川原での敵前上陸演習等にあげく、楽しい思い出など殆どありませんでした。

さて時が移り、それから二十年余り経過した昭和四十二年、酪農大に勤務することになり、昔の軍隊時代のことを思い浮かべながら、あの秘境「ひるぜん」はどのように変わっただろうか、深い関心をもって再び任地蒜山に向かいました。案の定、というより予想以上に蒜山の開発は進んでいて、道路や町並みは整備され、古い軍馬の放牧場や演習場だった蒜山原野は、大規模草地や開拓農地として改良され、また多くのジャージー牛が導入されて、全国屈指の集約的酪農地域となり、また三木ヶ原には、大学の第二牧場をとり囲んで国民休暇村その他の観光施設が立ち並んで、西日本有数の観光地となり、全くその面目を一新しているのに驚きました。あの辺境の地「ひるぜん」がこんなに素晴らしい変貌をとげたのは、一つには広大な蒜山原野を有し、また大山隠岐国立公園の一面を占める優れた自然環境を備えていたからですが、同時にまた、国・県等の開発計画とこれを受けて立つ地域



の人々の熱心な努力の成果でありましょう。

さて、酪農高等学校における思い出となると、余りに多く枚挙にいとまがない位で、またの機会に譲り、学校自体のことについて一言申し添えたいと思います。高等学校が創立されて以来、年々施設、装備等が充実、近代化され、今や全国で唯一の大規模酪農専門学校として、その存在価値は非常に高いわけですが、一方入学希望者が減少して、恵まれた環境、施設、充実した指導陣容等は、誠に勿体ない感じがいたします。これは、酪農経営不振の社会的情勢に起因する点もあるかと考えられますが、我々学校関係者一同声を大にして、今後一層組織各県の理解と協力を得ると共に、「蒜山高原に酪農のメッカ酪大あり」ということを更に広くPRしようではありませんか。

## 創立二十周年に想う



永井 仁

(昭和48年4月～53年3月 副校長)

創立二十周年おめでとう。心からお祝いを申し上げます。この二十年、長いような短かいような感慨深いものがあります。私の在職したのは、丁度折り返し点の十周年を間にはさんだ昭和四十八年から昭和五十三年、卒業生は八期生から十二期生までの五年間、私の県職員生活二十五年弱のうちの五分の一だったが、最高に楽しく充実した日々でした。その理由の一つは、酪農をやりたいという強い目的意識を持った若者達と寝食を共にしての触れ合いでした。

教える等という能力も無く、またそのような大それた気持ちは、毛頭無かった。ただ青春の一頁に、酪農高等学校で過ごしたという誇りのようなものを持ってもらえればよい。そして、寮で大いに喧嘩をして、自治というものの尊さと難しさを養ってくればそれでよい。素直で健康な心身でご両親の許にお返しすることのみ考えていました。お蔭で卒業生の諸君が立派な経営者として活躍してくれていることは、本当に嬉しいことです。

このことと並んであげなければならぬことは、素晴らしいスタッフの皆さんの献身的な協力を得たことです。人造りは人を造る側にあるといいますが全くその通りで、自分達の家庭を犠牲にしてまで各持場で能力の最大限を発揮していただいたこと、これが事故らしい事故もなく卒業生を送り出せたことに繋がったと思います、今でも感謝の気持ちで一杯です。

そして、忘れてならないことは、関係機関の皆さん方の大変なご協力を得たことです。昭和四十八年といえば、第一次オイルショックの直撃を受けた年にたてた施設整備五カ年計画。計画を取決めてもらったのが現校長の石田さん。当初の総予定金額は二億五千万円。その計画を決めた石田さんですら、とても出来ないと言われ、(?)されたほどの無謀とも思われた計画も、関係機関の積極的なご協力により、当初計画した施設以上の整備が出来、投入した金額も倍の五億円にも膨れ上がりました。

その中のエピソードを一つ。それは、地方競馬全国協会の補助率のアップのこと。創立時の補助率は三分の二、それを粘りに粘って五分の四に引上げていただいたこと。このように補助率をこちらの要望でアップしてもらったということは、今後も余り無いことだと思います。しかし、このことを実施していただいた多くの方々のうち、地全協の



藤井常務理事、側面から応援していただいた中四国農政局の新井生産流通部長、ゴーのサインを出してくれた田淵校長のご三方は既に故人となられており、亡き霊に心からお礼を申し上げます。このように各方面からご援助いただけたのも、あの偉大な県立酪農高等学校の基礎と酪大精神を作られた故惣津先生、財団の基礎作りをされた故蔵知先生の遺徳のお蔭であることを忘れてはならないと思います。

最後に二十周年に相応し明るい話題。それは八期生の広島県庄原市の田河一伸君が、第十五回全国酪農青年婦人会議の酪農経営発表大会において、全国六地区の代表を押さえて最優秀賞を獲得し、農林水産大臣賞を始め数々の賞を受賞しました。農林水産大臣賞は、乳牛改良の部では数多くありますが、経営部門では初めてのことだと思えます。受賞の栄に浴した本人はもとより嬉しいでしょうが、審査員の末席を汚していた私の喜びも想像してください。

この大会は広島市で開催され、全国から酪農青年婦人が約千人集まりました。その大会の総合司会をスムーズにしかも堂々とやってのけたのも、同じ広島島の五期生野崎幸雄君でした。「酪大卒業生ここにあり」と感じたのは、私だけだったでしょうか。この外、各地で卒業生は地域のリーダーとして活躍をしております。酪大卒業生は、このような経営をして活躍をしているのだということ、この二十周年を機に大きくアピールし、酪大の灯をもっともっと大きく輝くよう頑張らしましょう。



(実習スナップ)右端が8期生の田河一伸氏

## 想　い　出

第一期生 繁田 寿夫

創立二十周年お目出度うございます。

県立時代からいうと、酪大も二十四期になるのですね。私は(財)中国四国酪農高等学校の一期生として入学しました。この年は特に雪が多く、勝山から蒜山に向かうバスの外は、きれいに植林された山の木が雪で折られ、大変な所へ来たものだと思います。一期生では、県内はむろん、大阪、広島、島根から集まっていた、入学当時二十二名(うち女子二名)で、午前中講義、午後実習作業の生活を送りました。

講義して下さった先生方は、みなさまやさしく丁寧に教えて下さり、有難く思っております。しかし、作業は大変でした。三、四名で班を作り、一週間交替で作業を変えていきました。内容は、搾乳、清掃、またジャージーの種雄牛が繋養されていたので、種雄牛舎の世話では、蹴られたり突かれたりしました。牧場作業では、トウモロコシの手播き、手刈り、乾燥調製では梱包された草をハイホークで二人でさし、積み込み、苦しかったのを思い出します。搾乳作業の思い出も、パーラー中心ではあったのですが、故障も多く、そんな時は四頭搾乳用の移動搾乳器があり、これをトラクターで牽引し、草地に持って行き、搾乳しました。雨の後などは黒ぼこで汚れ、清拭は大変で泣かされました。

一期在学時の三木ヶ原には、今ほど建物もなく、第二牧場、第三牧場、学校の三木ヶ原寮と、他に建物といえば、国民宿舎、ユースホステル、民家が少し、道はといえば、有料道路の工事が始まったのがこの年だったと思います。第二牧場のほとりにポプラの植え付けもしま





学生寮前(筆者左端)



ソフトボール大会

したが、今ではどの位残っているのだろうか。ここにあった寮には、夏の間少しの間入り、本校へ通った。また四十二年の春には植樹祭が開かれ、今も本館前に松が残っていると思えますが、植樹祭準備のため、連日掃除ばかりしたのです。この時、天皇、皇后両陛下を案内されたのが、在学当時の故蔵知校長先生でした。先生は、案内のため一カ月前からお好きな煙草をやめ、大変な気の使いようでした。わずかな滞在時間で、数キロやせたとわれ、おいしそうに煙草を口にされていたのを思い出します。

余暇時間も、先生、生徒の区別なく、ソフトボールの試合、スキートの競走、蒜山三座の登山等、楽しい思い出が沢山思い出されます。同期生のうち、卒業後酪農を営んでいる者は数名と、さびしいですが、同じ釜の飯を食べた仲間同士、全員集まる機会がほしいと思えます。畜産をとりまく諸情勢は大変さびしいおりですが、後継者なしでは



三木ヶ原寮

活路は見い出されないのでしょう。これからも、優秀な人材を育て、ますます酪農大学の発展を願っています。

## 酪大時代の思い出

第四期生 遠藤祐史

(財)中国四国酪農大学創立二十周年おめでとうございます。私は第四期生として、昭和四十三年四月五日に入学しました。受験生九十二名、合格者四十五名だったと思います。

私は一年遅れての入学でした。他にも数名いたと思います。以前はもっと年令に差があったと聞いています。それも昭和四十年代は、畜産振興が叫ばれ大型化(多頭化)が始まり、酪農の将来も非常に明るい時代だったと思います。そうした中であってか、酪大に多くの希望



者が集まっていました。私達も、そういう気持ちで入学していましたが、時には熱っぽく将来計画を語り合ったものです。学生生活の中でも寮生活は、高校時代とは違って将来目標を同じくする者同志ですから、一味違ったものであったと思います。けんかをしたり、一緒に飲んだり、グループで山登りをしたり、等々……。また、それぞれの個性に合ったニックネームを付けてもらった五名の女性達も、講義に作業に大変頑張っていました。

講義には、岡大等から講師としていられていました。現在では、教授として御活躍しておられる方もいらっしゃいます。当時の講義の時間は、実習がきつかったのか、夜の語らいが長かったのか、ほとんどが居眠りの時間でした。良く食べ、良く飲み、良く寝たものです。しかし、さすがに実習となると、サボルものは一人としていませんでした。広い土地で大型機械を使つての作業は、将来の自分達の目標だったのでしよう。しかし今から考えると、大きな機械もありましたが、人海戦術的な作業が多かったように思います。例えば、数町歩というトウモロコシの種播き(手播き)、鎌での刈取り等々……。現在の様々なアタッチメント機具がなかったからでしょう。

三つの牧場が全て、フリーバンのミルクンパーラー方式、当時の酪農の理想の経営形態であったのでしようが、実際には狭い耕地しか持たない私達は、それぞれの地域に合った経営を、夜を徹して研究し合ったものです。

私達が入学した頃から、自給飼料の増産が叫ばれ、休耕が始まり、水田酪農が非常に伸びて来ました。そして乳価の据え置きが多頭化に拍車をかけ、経営基盤の大きな者が残りました。私達の同期生もいろいろな方面に転向し活躍しています。農業全体が大変な時代ですが、頑張っていきたいと思っています。



蒜山登山(筆者後列右から2人目)

私は昭和五十二年夏、機会があつて全国酪農協会主催のヨーロッパ五カ国、二十日間の視察旅行に参加させて頂きました。ヨーロッパ(デンマーク、西ドイツ、オランダ、スイス、フランス、イギリス)の酪農と一口に言っても、さまざままで、それぞれの国・地方によって、その地域に合った経営を行なっていて、大変参考になりましたと思います。この旅行の期間中、

校外実習中であつた学生の方に我が家に来て頂き、安心して旅行出来た事を大変感謝しています。その後学校からの依頼で、半日講師として視察報告をさせて頂きましたが、同じ仲間として気楽に話し、聞くことが出来、おもしろい企画であつたと思います。

三十代半ばを過ぎて十数年前の事を思い出してみると、酪大時代の事が一番鮮明に思い出されます。何を考え、どんな事をしてきたか……。時代は、早いテンポで進んでいます。これからも先端技術を取り入れた、すばらしい学校に発展することを願っています。

## 酪大創立二十周年記念に寄せて

第七期生 三好正文

岡山発の中鉄バスに乗った。旭川のほつりを迂回しながら走る。切り立った山が川のそばまで迫って、危険を感じた。何時間走つただろうか。やがて、目の前に突如として町の光景が広がった。今にして思



えば落合町である。そこから又、山道を辿って行くうちに山に雪が見えるようになってきた。瀬戸内の小さな島で生まれ育った私にとって、この頃に雪を見ることは殆どない。まして、山の中へ深く入ったこともない。少しずつ「俺は一体どんな所へ行くのだろうか」と、いう不安が胸の中を占拠しはじめた。やがて、峠にさしかかり広い野に出たのには驚いた。一面の雪景色。こんな山の中に、平野が有るのが不思議でたまらなかつた。これが、蒜山高原との最初の出会いである。一面の雪景色、実に美しい風景だった。瀬戸内にはない壮大な山の風景がすっかり気に入った。入学試験で友達も出来た。

蒜山の春は素晴らしい。空の青と、白い山と、緑の草原と、実に美しい。夏は働いた。友と一緒に草地に出て、真黒になって働いた。ポプラ並木の蔭は涼しかった。牛がのんびりと牧草を食む姿は、一日の労働の疲れを忘れさせてくれた。

私の人生にとって蒜山で過ごした日々は、人格形成の上で有意義であつたと思う。何を学んだかというより、蒜山での生活の方が強く印象に残っているのは不思議である。きっと、良き師に恵まれ、良友を得て楽しく過ごしたというのが、私の酪大生活であつたと思う。自然と共に生き、牛と生活を共にする酪農の素晴らしさを知った。自分も酪農をやろうと強く心に誓って卒業した。それから早くも十数年が経過した。絶望もし、理想と現実のギャップに悩みながらも、何とかここまで酪農を続けて来た。先輩方の活躍を聞き、負けてはならじと励みにもなる。後輩達には、頑張れと言いたい。酪大にはそんな家族的雰囲気の漂う校風が有るように思う。

最近の酪農も、乳価の低迷等多くの問題を抱えて難しくなつて来ている。技術もどんどん変化し、最近の生命工学、電子工学、通信技術の発達、農業に及ぼす影響を予測すること自体難しい。

私も、何年酪農を続けられるか解らないが、新しい技術の修得に努めると共に、酪農の原点に立ち返り、家族全員と一緒に働き、貴重な生命を扱う仕事を続けられたら幸福に思う。

今般は、酪農大創設二十周年、誠におめでとうございます。同時に最近の生徒不足、時代の流れかとさみしくも思う。

これまでの酪大の果してきた業績と、学生教育に携ってきた職員の方々に、深甚なる敬意を表します。今後共、何卒よろしくご指導、ご鞭撻の程お願いします。

我が母校の一層の発展と、関係各位のご健勝を祈念して擲筆とします。



トラクター実習(筆者右端)

## 酪農大学校の思い出

第十四期生 平野耕平

私の入学した頃の酪大は、ロータリーパーラー、寮、体育館が新築されて間がなく、まだペンキの匂いがしていたのが、印象に残っています。又在学中には、第一・第二牧場ともに気密サイロが完成し、大型作業機も整い、教育設備、牧場設備ともに充実し、それらは日本一といっても過言ではなかつたでしょう。

前期には、まだ古い木造平屋の寮がそのまま残っていて、その中に



は落書きなどが有り、先輩方がここで勉強、生活をされていた様子が伺えます。

私も新しい寮へ入り、そこでの生活は、酪大時代の一番大きな思い出となっています。

高校を出たばかりの私達が、親元を離れて寮生活に入るわけですが、その事で、開放感と不安の中で「酪農に従事する」という共通の目的を持った仲間達との団体生活をする事は、自由、秩序、協調性を自然に養い、大変有意義なものといえるでしょう。

毎日「牛」について語るも良し、酪農経営について論じるも良し。全寮制ですから、いつまでも仲間が、相談相手がいるわけですから。しかしこの寮生活にも、最大の難点がありました。それは「赤信号、みんなでわたれば怖くない」の言葉に象徴される、現代の若者の集団意識でしょうか？

校内への車の持込み、寮内での飲酒および電気を使用する楽器等の使用は、御法度のはずです。車の持込みは、交通事情の悪い蒜山地方でしかたないとしても、入学式前夜の先輩方の歓迎式以来、卒業の日まで、寮よりアルコールの消える日はなかった事でしょう。ディスクミュージックも全盛期で、各部屋のラジオカセットからは、音の止む間がありません。激しいものになると、百ワットのステレオアンプが全開で鳴り響き、近代的な寮の壁も、その振動には耐えきれず、隣りの部屋の本棚の本がころげ落ちたこともあります。こうして寮は、毎日夜十二時頃まで、騒音のるつぼとなっていました。しかし、早朝の食前実習には、寝ぼけ眼をこすりながらも、遅刻者もなく、元気よく「オース」のあいさつで、眠気を振り切り、牛の世話をしたものです。今一つ、大人になりきっていない私達のあまえと、スリルを味わう行動が、先生方には大変御迷惑をおかけした事と思っています。

しかし「いくら夜ふかしをしても、翌日の実習にさしつかえて、仲間に迷惑をかけることのないように！」ということが、十四期のルールでした。幸いにも、一人の過ちも事故もなく、最後の学生生活をおくることができました。現在私は、



第1 牧場実習中 (筆者前列右端)

のです。

最後になりましたが、あのすばらしい蒜山の景色にかこまれた学び舎、酪大が、いつまでも私達の第二の故郷として、発展する事を希望します。

酪大卒業から我が家の酪農経営にたずさわっているわけですが、仕事をしても、あの懐かしい日のことか思い出されてきます。本年で酪大も二十周年を迎えるので、卒業生の皆さん、お世話になりました先生方も、この二十年の間に、様々な思い出を作られたことでしょう。お互いに忙しい酪農で、便りも途絶えがちとなっています。機会あれば又、この蒜山の地に集い、語りあかしたいも



## 先人の軌跡

### 新聞記事から (昭和38年8月13日付山陽新聞)



### これからの酪農

岡山県畜産会長  
岡山県酪連会長 惣津 律士

最近の酪農ムードにつられて、簡単に酪農経営がやれるように思う人が案外多いのではなからうか。一般に酪農家の経営知識が乏しいとは、よくいわれる言葉である。しかし経営戦略のみで、乳牛は十分な能力を発揮してくれるはずはない。酪農をやる上に必要なすぐれた知識と技術と土性骨を酪農家が身につけているかどうかによって、これからの酪農の勝負が決まるのではなからうか。

貿易自由化になると「酪農はペシャンコだ」とはよく聞かされる言葉である。そして酪農家は限りない不安をいだいている。しかし私は決して貿易自由化を恐れる必要はないと思う。日本は日本なりの特色ある酪農を樹立すべきである。このためにも国も県も、団体も乳業者も、同一方向に向かって研鑽、努力すべきである。地域の立地条件を最高度に活用して、われわれ酪農人の協同の力で創造した酪農は、や

がて自由化のアラシの中で大きい発言の地位を占めるであろうことを私たちは期待して努力すべきである。

私は一昨年十二月に蒜山に設立された県立の酪農大学の初代責任者として赴任してしまい、将来酪農経営者たらんと志す若人たちと起居をともにし、昼も夜も酪農の前途を語り合う機会にめぐまれた事は、私の生涯を通じて最良の年であったと思っている。

今でこそ人づくりという言葉が使われているが、当時は口にする人はなかった。これからの酪農に近代的なセンスと技術と知識をもった青年が必要であることを洞察された三木知事の偉大さは、現地で研修が進められるにつれてひしひしと私は身を感じたのである。

「立派な校風を作ってくれ」と一昨年十二月の開校式当日に知事が訓示した言葉を、私たちは深く胸にきざんで「酪農の久遠の城」の建設にまい進したものである。

筋金の入った酪農人の造成が、徐々に蒜山の一角に誕生したのである。私は学生におりにふれて「君たちは私たちの教えることを通じて、物の考え方、見方を精進する必要がある。うんと本を読み、うんと建設的なディスカッションをして疑問をもつようにせよ。そこに進歩があるんだ」と話した。蒜山のジャージー農家で立派な成績をあげておられる方々は、すぐれた考え方をしている。農業教育が今日ほど重要性をもっている時はないと私は思っている。

しかし案外、従来の講習施設に人が集まりにくいのはどうしたことか。農村青年諸君が都市へ行く世相は十分に承知できるけれども、教育施設の内容に魅力が乏しいのではないか。今日の農業施策はとかく行政が先行して、教育とか試験研究はあとからトボトボ歩いているせいである。これらの整備とか拡充になるとあとまわしになるのが通例である。農業構造改善事業があすの日本農業を約束するのであるとす



れば、よろしく、試験研究機関と教育機関に為政者はうんと配慮すべきであろう。

「酪農は成長株だ」と時代の寵児のようにいわれ、そのムードは華やかである。単行本も雑誌も、もうかる酪農はこうすべきだとか、何ヶタ農業は酪農からとか、盛んにとり上げている。しかし、そうした表面的な派手さに目をうばわれ、立派な経営はすぐれた知識と技術によつてのみ実現できるといふ簡単な公式を忘れてはならない。アメリカでは、成功する農家は立派な技術者であり、よき経営者であり、そしてすぐれたセールスマンであるといわれているのだ。

酪農経営者は決してなまやさしいものではない。乳牛は海外から導入された。日本的に乳牛そのものを改良する必要もあるし、飼料作物の研究、自給率の向上と、残された問題はたくさんある。しかし、どうしてもやりとげなければならぬことであるとするならば、われわれの英知と根気よい努力によつて、いままでの外国のマネに過ぎなかった酪農から脱皮し、日本の風土に合った、農家経営に調和した独自の酪農を築き上げることが、あすの輝かしい酪農をつくりあげるのだと強調したのである。



惣津律士胸像  
(財)中国四国酪農大学校校門前

## 寮歌

作詞 惣津律士

一、緑したたる陽春に

ジャージ遊ぶ蒜山の  
文化の香りいや高く

学園したいて我は来ぬ

二、流れは清し旭川

北斗の星座仰ぎつつ  
固き決意の若人は

誇りと栄を歌うなり

三、錦繡の影映ゆるとき

偲ぶや故郷の秋の曲  
我感傷の夢追いぬ

真理の道はいとけわし

四、神秘の白衣蛭が峰

無限の光ほほえみぬ  
われらが築きし酪農の

久遠の城を来り見よ



# 「ある農林部長のメモ」から

## 苦心惨胆中国四国酪農大学校の発起

元岡山県農林部長 山下 肅 郎

農業教育、農業後継者養成、と一口にいうけれども、ノート鉛筆、鋏に鎌の時代はいざ知らず、今日の近代化された高水準の施設を揃えて、若い人達をアピールするような教育をしようとするなら大変な費用がかかる。

一つの事例を示してみよう。

岡山県には、他府県に類を見ない岡山県立酪農大学校がある。

これは三木知事の「南に水島工業地帯、北に乳の流れる郷を」とい

う理想主義計画の一環として、乳の流れる郷作りの基幹として、創設されたものである。

蒜山原野は、日本原（勝田郡奈義町）とならんで帝国陸軍の演習地であり、ここに住む人達は冷害とたたかいつつ、水田をつくり、馬と牛を飼育して貧しい生活に耐えていた。終戦後、軍用地は、農林省の開拓財産になり、開拓に転用され、入殖者が入って来た。また、一部は地元の採草地に払い下げられた。



林業振興大会での筆者 (39.3)

昭和三十年この地が酪振法にもとづき集約酪農地域に編入され、国の融資によってオーストラリア、ニュージーランドから一、一七五頭のジャージー種が入れられた。

県としても、農業史上、これは一つのエポックメイキングな事業であると同時に、貧しい農家が期待をかけて求めた牛だけに、失敗させてはならない。そこで、この地に酪農指導所を置き、技術指導は勿論、人工授精、家畜診療所一切の世話をすることになった。これが酪農大学校の種となった。

酪農大学校は、三十六年二月県議会の議決を経て建設に着手し、十二月に酪農試験場を借りて開校し、三十七年四月から蒜山の建築が完了したので移転した。

私が改めて申すまでもなく、この種の県営の、農林部が行なう専門教育施設（教育関係ではないということ）としては、他に類例を見ない規模のものといってよい。それから四年を経た今日においても、随分立派な種畜場や酪農試験場は出来ているが、農林部の独立した酪農教育施設としては、これだけの規模のものは北海道を除いて全国になんといってよかろう。

ところがこれだけの施設をしても、決して十分ではない。十分どころか、足りないことが一杯である。

第一は施設関係である。

寄宿舎は四人一部屋だが、長期寮生活ではどうも無理である。

トラクター（借物）、カッター等は揃えてあるが、ハイコンディショナー、ハイベラー、肥料散布機、大型播種機、ランドレベラー等がない。生徒教材用と実際の運用と、少なくとも複数の機械を必要とする。

図書室、娯楽教養室が足りない。



第二は先生関係で、山村僻地のため、子弟教育に不便なので、殆どが単身赴任で、土俵月来先生ばかりである。

第三は最も主要なことであるが、ここで生徒は何を学ぶかということである。どうして草をつくるか、どうして乾草をつくるか、牛の飼料をどうして調整するか。そんなことは酪農大でなくても、酪農試験場で十分出来るはずである。講義も県の職員の講義だから、酪農大に於いてはじめて聞けるというものでもない。そのところを、つきつめて考えると、酪農大は他県に類を見ない規模をもつ特異な施設であっても、なお中途半端なもので、「酪農大になればこそ」というものに欠けているということが出来る。

岡山県の酪農大は、このような意味で危機に逢着している。ましてや、中四国各県においても同様であろうことは推測に難くない。

しかしこれを少しでも魅力のある教育の場に再建するには、なお、一億円を超える投資を必要とする。こんなことを、各県それぞれが設けようとするということは、およそナンセンスである。非経済もはなはだし

い。

そこで中四国農政局とも相談して、中四国酪農大に編成替えをする。そのために地方競馬全国協会から、地域開発のための補助金を貰ってくる。中四国九県に兵庫県を加えて、財団法人を設立して運営する。かような趣旨で中四国農林部長会議、同畜産課長会議に話を持ちかけたが、各県ともに、小さいながら、一応畜産技術者の養成施設はあつて、それが施設不十分で運営もうまく行っていない。生徒も思うように集まらないということ、いずれもなやみの種となっている最中である。患部は切ればよいというのは正論であるが、行政ともなると在るものを切ることは容易でない。ましてや、今の今までの施設整備で、予算を要求していた農林部長にとっては、岡山に共同施設

をつくつて、中四国一本にし、立派な酪農大をつくるから、もうこれは廃止するとか、予算はそちらに出資する方に切り替えてくれとは、なかなか切り出し難い。岡山県に対し競争意識（単に農村のみのことでない）の強い県においてはなおさらで、その辺が反対の中心になる。それやこれやで、農林部長会議だけでは決め難いから、知事会議に持ち出してくれということになり、県議会議長会（四十年二月十二日）、知事会議（四十年一月十一日）に議題として提出することになった。もっとも、これは中国だけで四国各県の知事さんへ依命によって、四国行脚をして依頼をして廻った。

会議をする度に、岡山県が折れて、経営費の赤字は岡山県が負担する、職員は岡山が出向させる、各県の出資は一応十万円とする、というふうなことで漸く話が軌道にのって来た。

しかし次の問題が控えている。ほんとうに立派な中四国酪農大の設立である。私が県を去るに当たって、気がかりなことの一つになってしまった。



# 学校の沿革

## 岡山県立酪農大学校

昭和36年12月 ○津山市大田の岡山県酪農試験場内に開校。

○酪農に関する基本的な知識技術修得と健全な酪農経営者を養成するための教育を実施。

昭和37年4月 ○真庭郡川上村西茅部に新校舎を建設落成と同時に、酪農試験場蒜山分場を吸収してここに移転し、新たに岡山県家畜衛生研究所を併設した。

○募集人員は一学年三十名、一年間に四カ月就学し、八カ月は在宅研修とし、修学期間は三年間であった。

昭和42年3月 ○閉校

## 財団法人中国四国酪農大学校

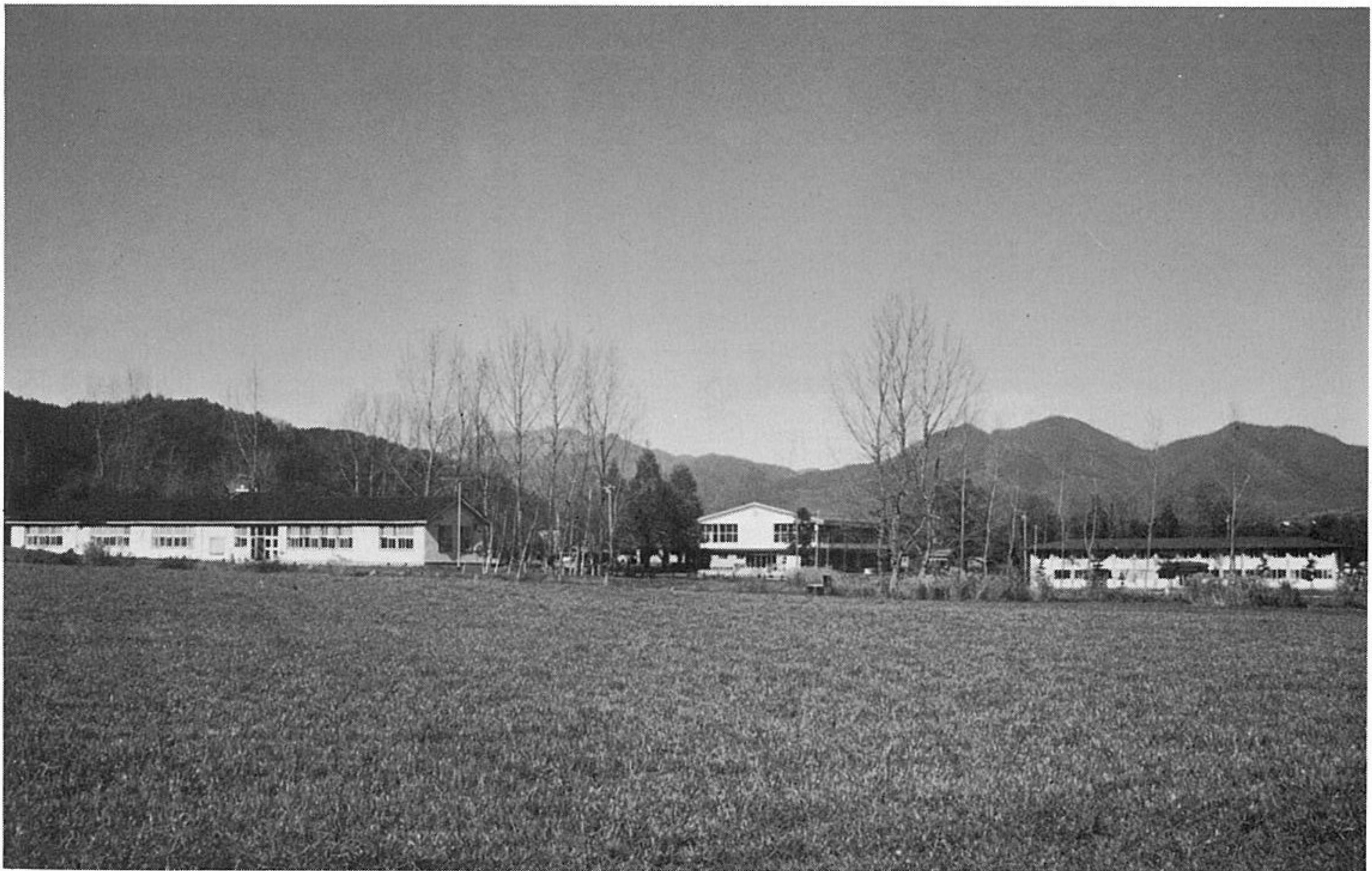
昭和40年11月10日 ○中国四国および兵庫県の各県は、基金を積み立て、財団法人組織による財中国四国酪農大学校を創設。岡山県立酪農大学校と三木ヶ原の岡山県乳牛育成場の施設を譲り受ける。

○目的 わが国農業の近代化に即応し、企業的経営能力を有する健全な酪農自営者を養成する。

○募集人員は一学年四十名、修学期間は二年間である。

## 主な施設

本校（事務所）	昭和37年	真庭郡川上村西茅部六三二
第二牧場	昭和40年	真庭郡川上村上福田一二〇五―七〇
第一・第二研修センター、男子寮、女子寮、体育館、職員公舎、牛舎、ロータリーパーラー（十二頭搾乳）、気密サイロ	昭和49年（百五十トン容二基、百トン容一基）	昭和49年（53年）



(財)中国四国酪農大学校学舎



写真でつづる二十年

【前身】

○昭和24年7月

岡山県中福田家畜保健衛生所開設

(岡山県真庭郡八束村中福田)

○昭和32年4月

岡山県酪農試験場蒜山分場設置

(県立酪農大学前身) (川上村西茅部)

【県立酪農大学校】

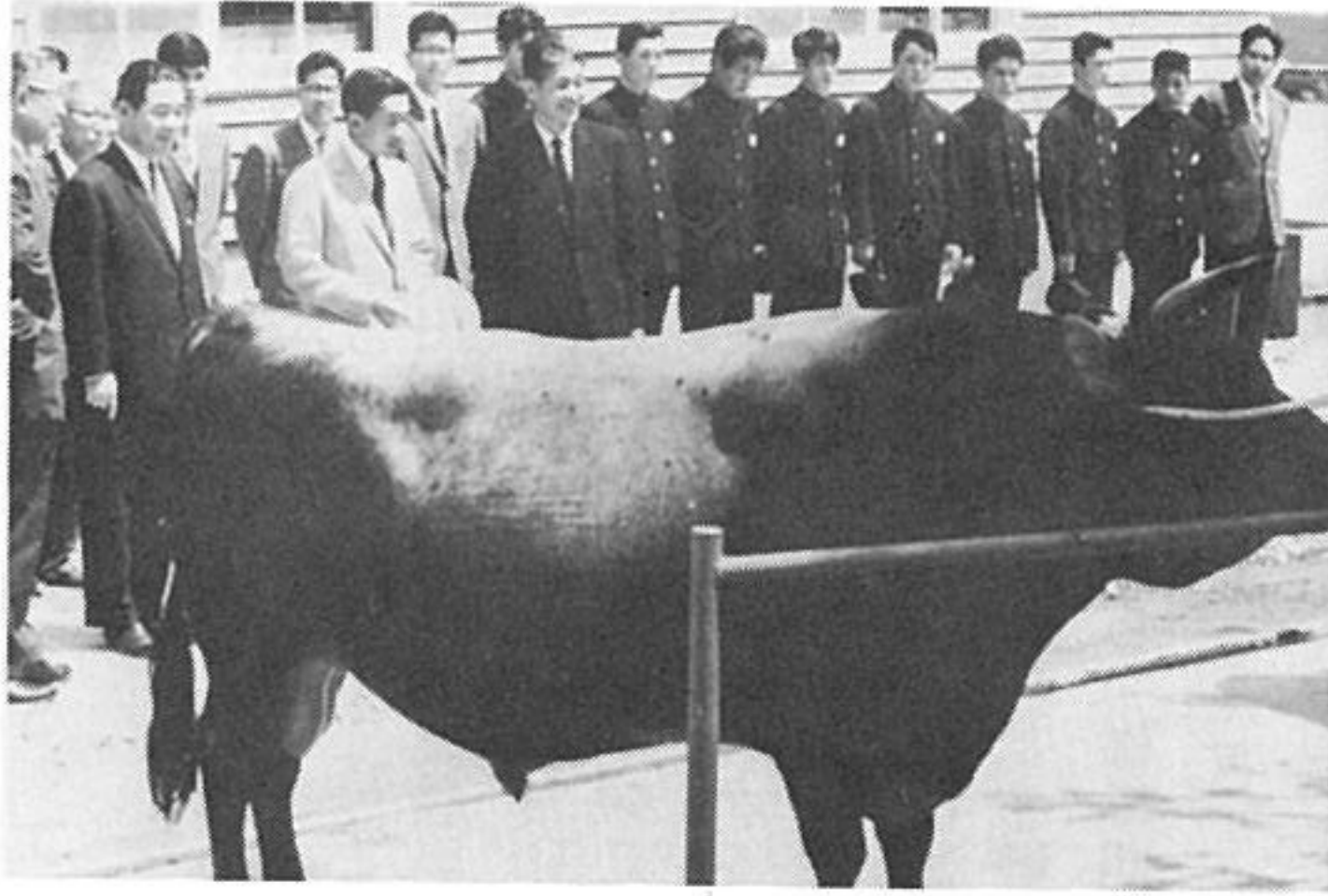
○昭和36年12月

岡山県立酪農大学校設立

(旧酪農試験場蒜山分場を充当)

○昭和40年8月

皇太子行啓



【財団法人中国四国酪農大学校】

○昭和40年11月

財団法人中国四国酪農大学校設立



昭和41年10月21日付山陽新聞



昭和41年11月6日付山陽新聞



○昭和41年8月

第一期生入寮



牧野改良実習



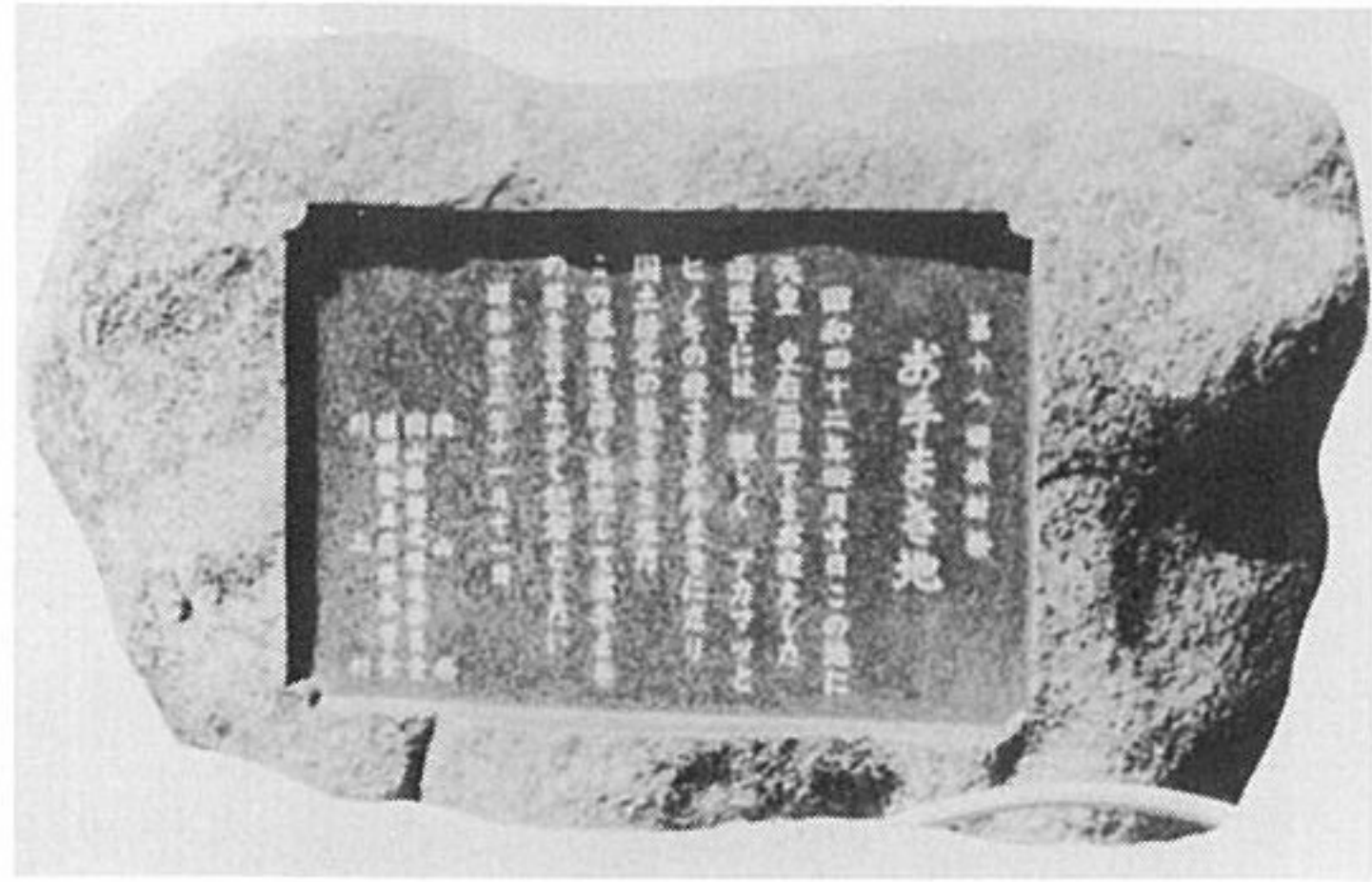
乾草調整実習



○昭和42年4月 全国植樹祭お手播き行事で天皇皇后両陛下の行幸啓を迎ぐ



蔵知校長から御説明を受けられる天皇、皇后両陛下



「お手播き地」にある記念碑

○昭和42年6月 西日本飼料研修会が本校で開催された。

○昭和42年10月 ワラビ中毒が発生した。

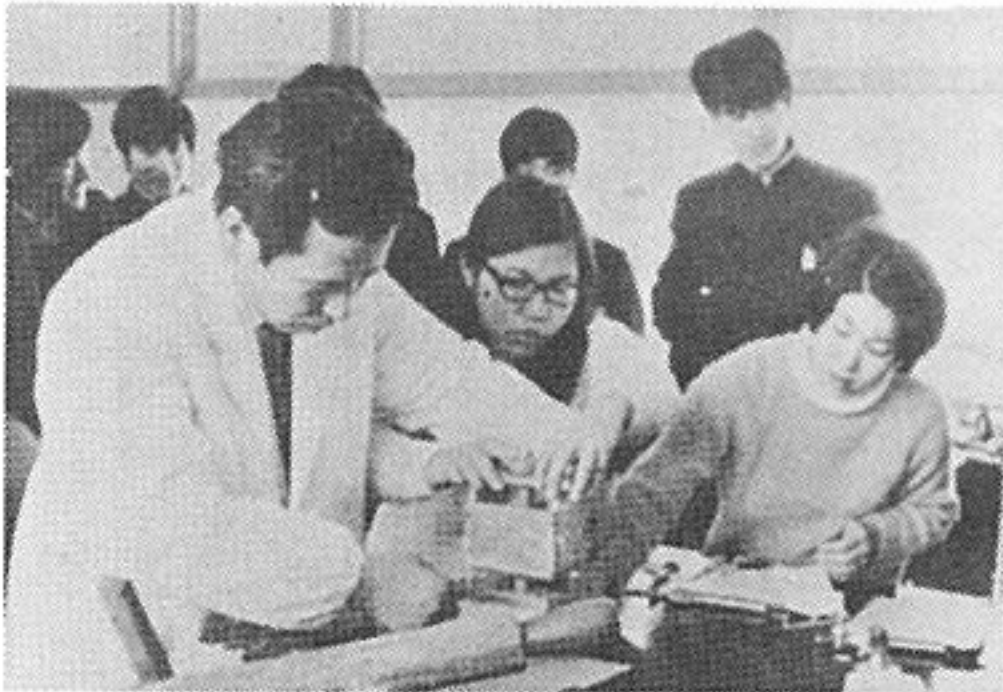
○昭和43年4月 牧場統合（第二、第三牧場を統合し第二牧場とする）

○昭和43年4月 オーストラリア駐日大使来校

○昭和43年9月 ニュージーランド交換学生来校

○昭和43年10月 第一回全日本ジャージー共進会（川上村・酪大）

○昭和43年当時の講義風景



乳製品加工実習（バター製造）



共進会スナッフ



メインポール



集合研修



共進会スナッフ



シンボルワッペン





夏期研修キャンプファイヤー

第三期生実習歌

作詞 近成吉行

- 一、若い我らの酪大は  
蒜山三座のすそに咲く  
今日も行く三木ヶ原にや  
でっかい希望の雲がわく
- 二、燃える闘魂酪大の  
腕はくろがね心は火玉  
でっかい大地に汗を流し  
友とつちかう酪大根性
- 三、仰ぐ先輩酪大の  
成行聞きたび血潮がうずく  
どんときたえた開拓精神  
酪大魂にや不可能あらず

○昭和44年8月

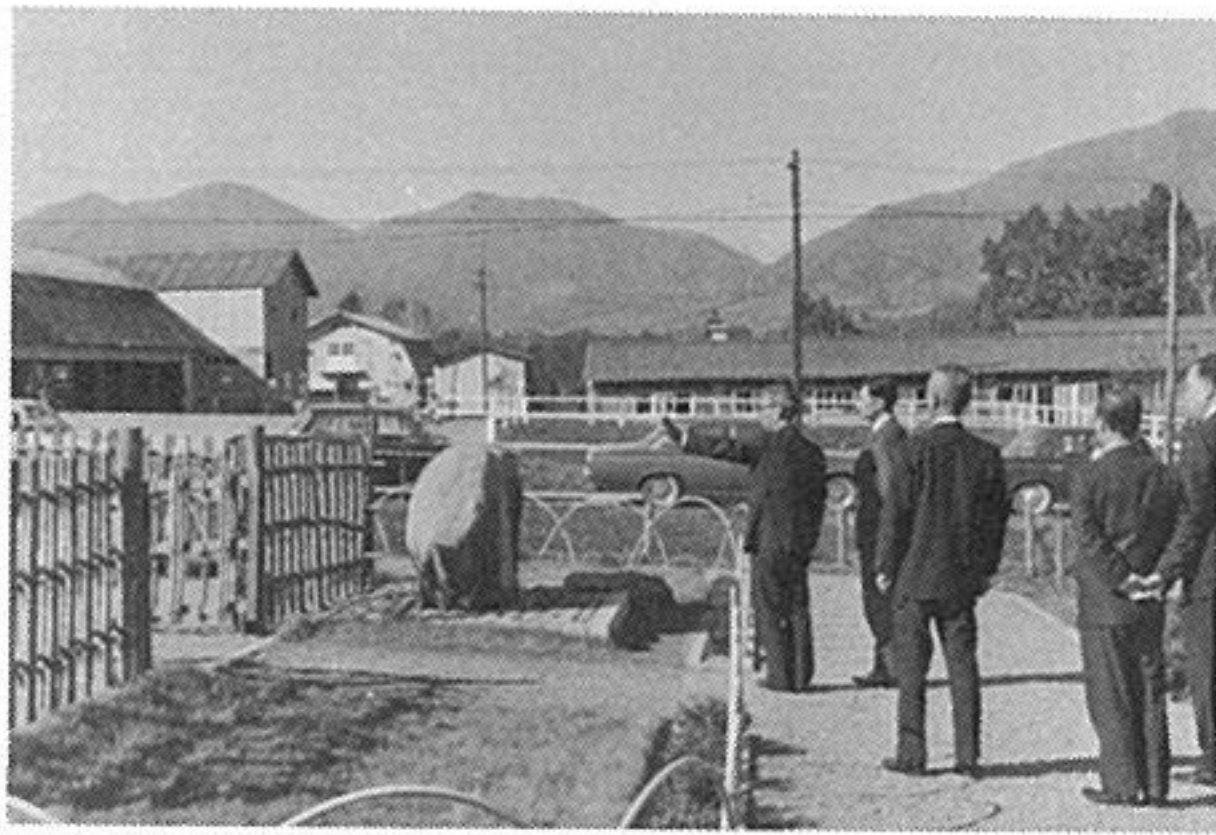
優良基礎牛導入（アメリカ）

○昭和45年5月

優良基礎牛導入（ニュージーランド）

○昭和46年10月

高松宮殿下御来校



天皇皇后両陛下お手播き地記念碑前の  
高松宮殿下花田校長が御説明

○実習風景



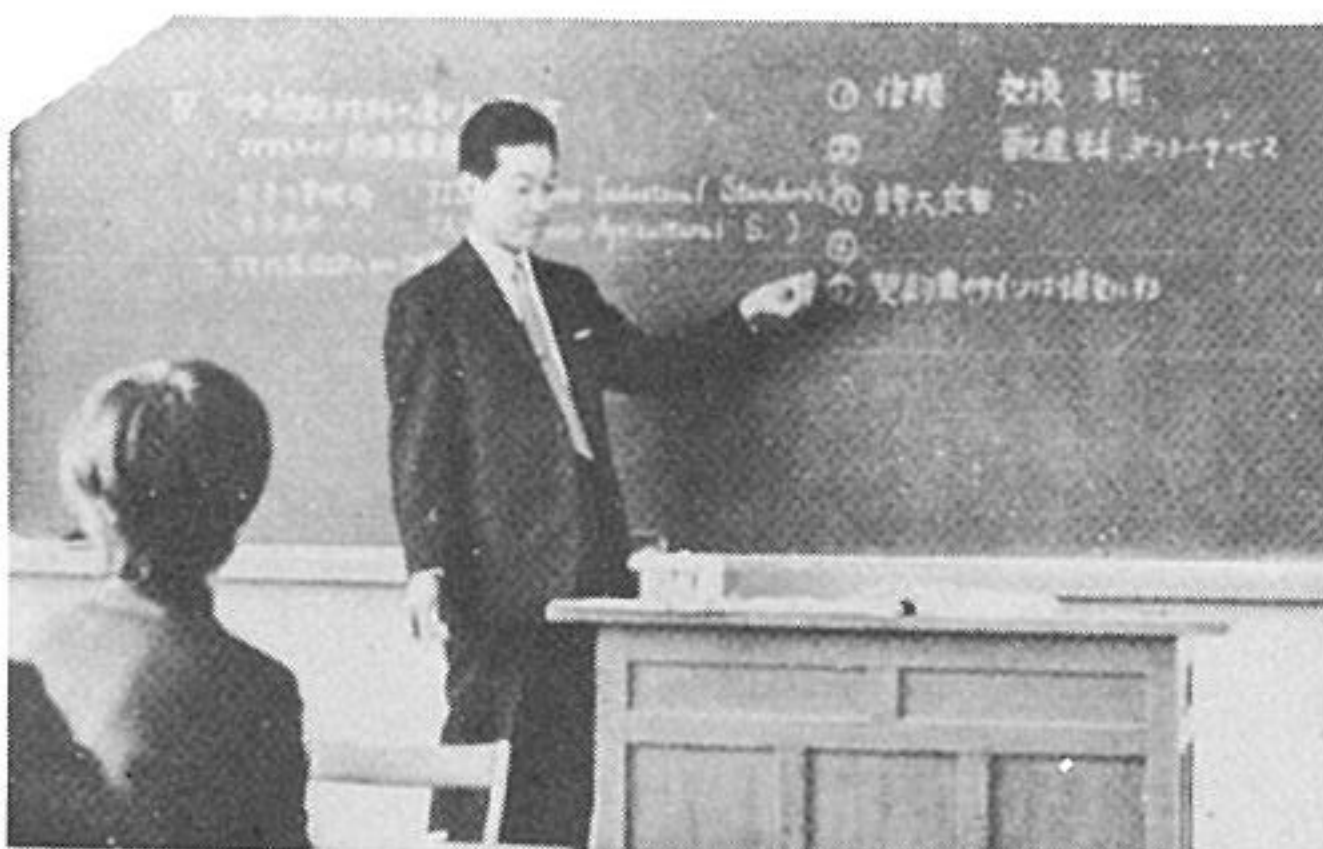
トラクター実習

○昭和48年3月

第七期生卒業記念に牛魂碑建立



第7期生三好正文氏揮毛の牛魂碑



講義スナップ



牧場実習



○昭和49年12月



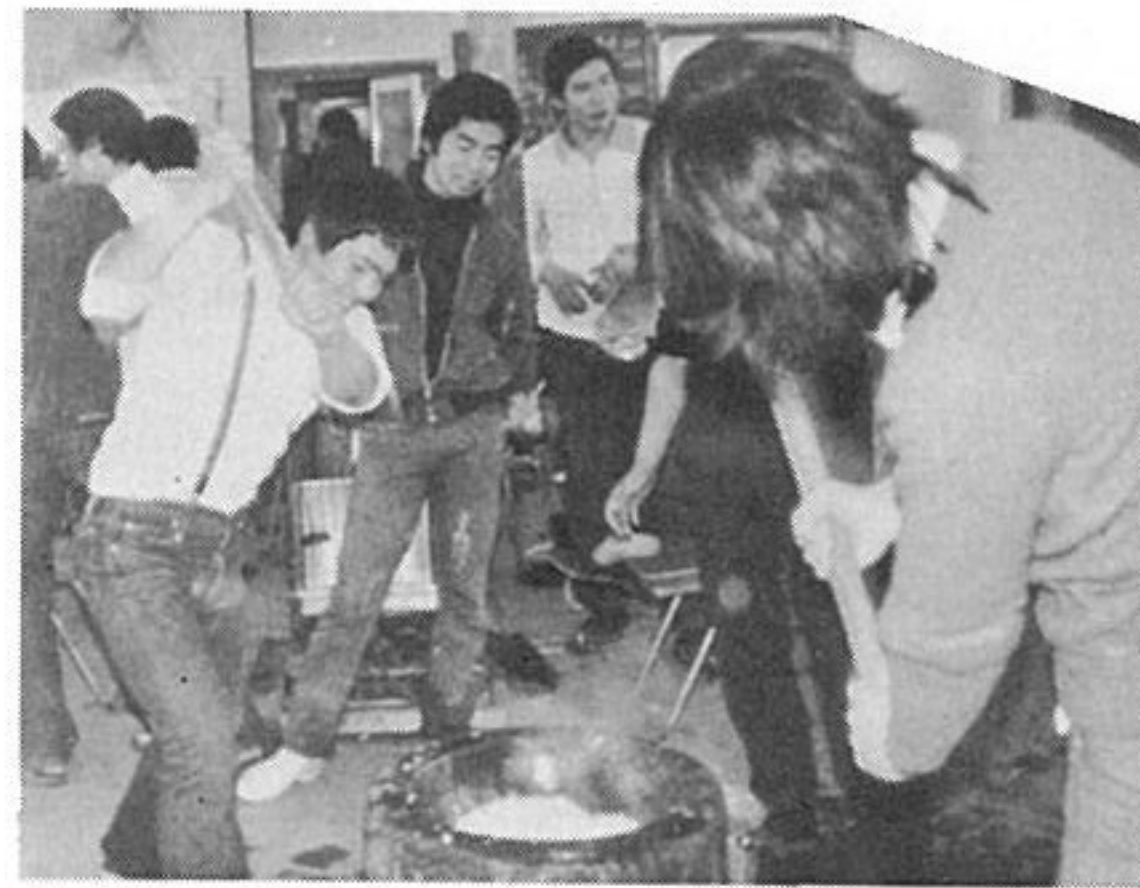
クリスマスパーティー

○昭和50年5月

NHKテレビ「酪農大を訪問して」放映



学園生活取材



餅つき

○昭和50年10月

全国ジャージー大会開催

(ジャージー導入二十周年記念行事)



○昭和48年～52年

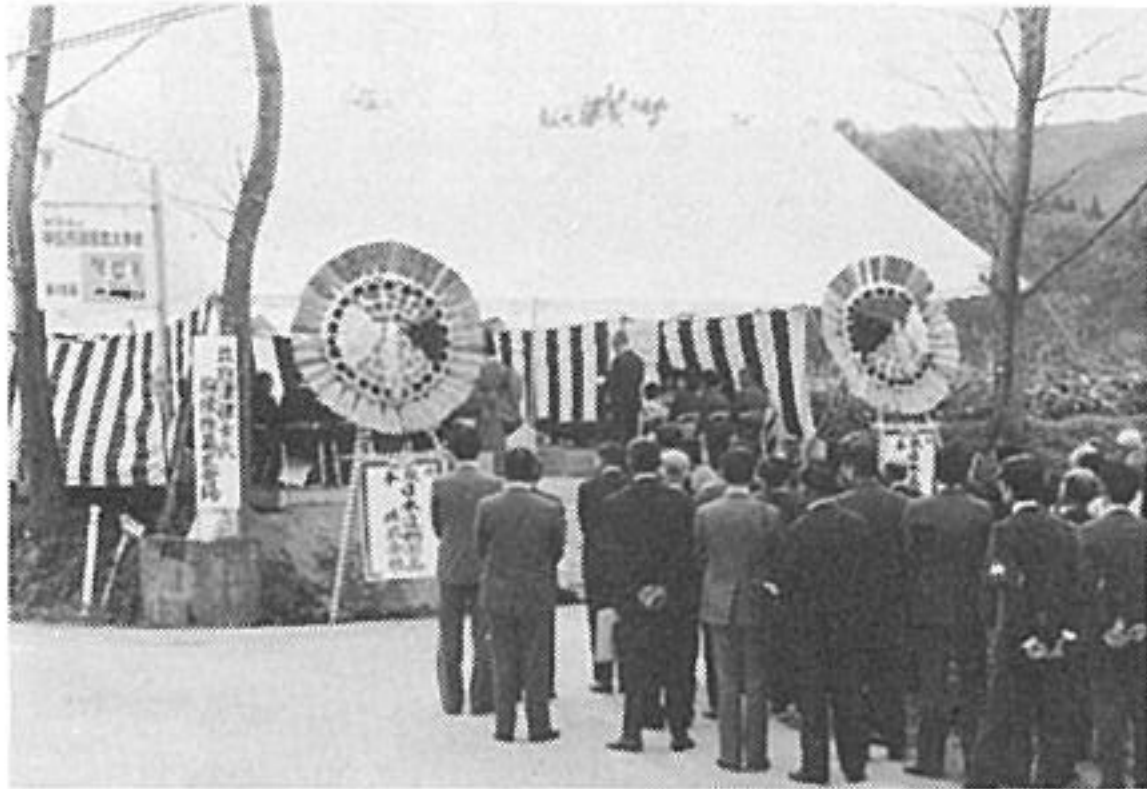
第二次施設整備事業実施

	教育施設	第1牧場	第2牧場
48年	—	牛舎改造 流下式 パイプライン バルククーラー	—
49年	—	農牧道整備 356m 草地造成 1ha	牛舎改造 スラリーストアー 設置 (300tパワード) 雑用水施設 1,371.8m
50年	研修センター建設 1階=研修室 食堂 2階=学生寮 46名収容 女子寮建設 8名収容	牧柵施設 7,450.7m 雑用水施設 4,246m	草地造成 4.1ha 農牧道整備 1,080.2m ハイベイラー 1台
51年	体育館建設 525m <sup>2</sup> 第2研修センター 建設 マイクロバス 29人乗り	ピックアップワゴン 1台 MF185トラクター 1台	ロータリー 1台 サイドレーキ 1台 マニュアルプレッ ダー 2台
52年	—	—	ロータリーパーラー 12ポイント1台
合計		363,936 千円	



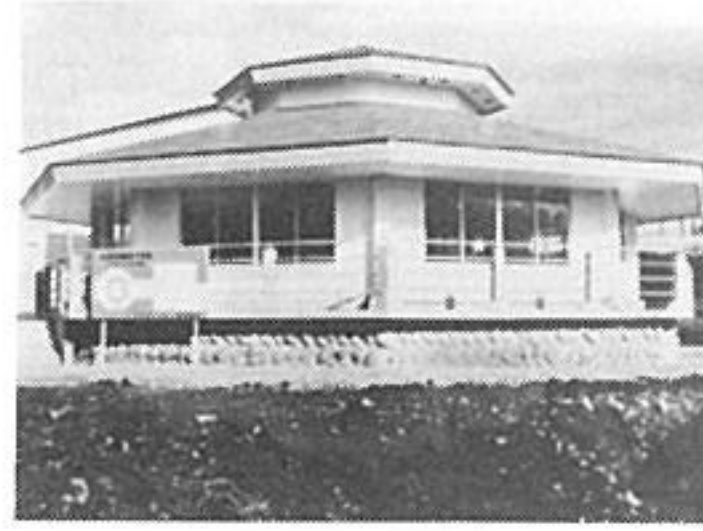
○昭和52年10月

○昭和51年5月



故惣津律士校長胸像除幕式挙行

酪農大学校の教育概要を映画化（山陽テレビ）



ロータリーパーラー  
(12ポイント)



女子寮



スラリーストアー



第二学生研修センター



体育館



第一学生研修センター

4. 非酪農従事者の内訳

区分	項目	人数	割合
	酪農関係就職	26人	44.1%
	農林業	3	5.1
	その他	30	50.8
	計	59	100

(注) 酪農関係就職者数には牧場等を含む。

5. 酪農従事者の飼養規模別内訳

頭数別	項目	人数	割合
0 ~ 9 頭		13人	8.3%
10 ~ 19		29	18.6
20 ~ 29		30	19.3
30 ~ 39		28	17.9
40 ~ 49		22	14.1
50 ~ 59		19	12.2
60 ~ 69		7	4.5
70 ~ 79		2	1.3
80 ~ 89		0	0.0
90 ~ 99		1	0.6
100 ~ 149		4	2.6
150 ~ 200		1	0.6
	計	156	100.0

1. 酪農就業状況

区分	項目	人数	割合
	酪農就業者	156人	72.6%
	非就業者	59	27.4
	計	215	100

2. 酪農従事者の専業・兼業の内訳

区分	項目	人数	割合
	酪農専業	121人	77.6%
	兼業	35	22.4
	計	156	100

3. 兼業酪農家の内訳

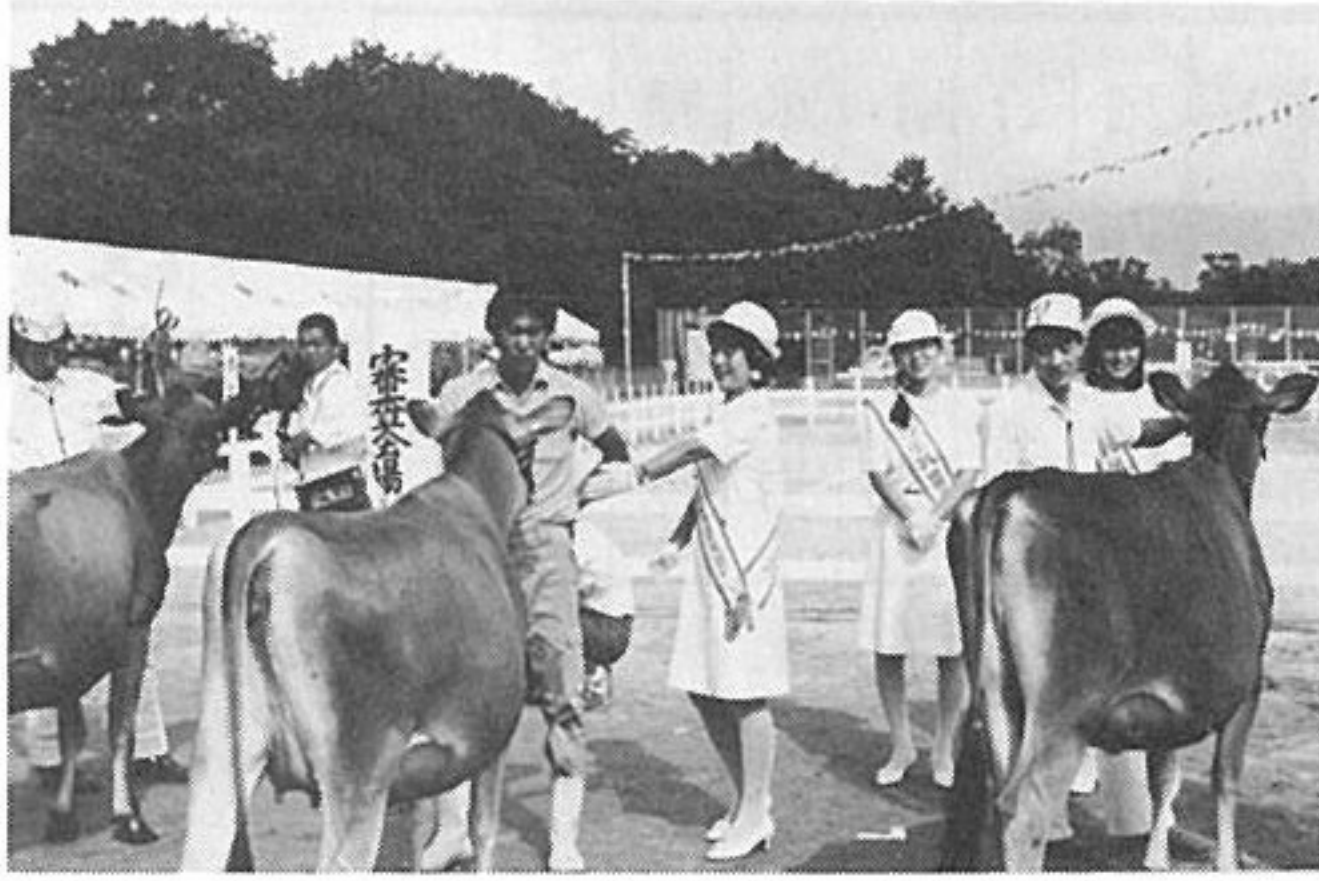
区分	項目	人数	割合
	酪農+農林業	7人	20.0%
	酪農+酪農関係勤務	20	57.1
	酪農+その他	8	22.9
	計	35	100

○昭和54年

卒業生の就業状況調査を実施

(県立一期から財団十三期を対象)





酪大出品牛上位入賞

○昭和59年9月

第二回ジャージー大会開催（共進会・経営発表会）



○昭和59年4月

故三木知事由来のスズランを津山市の福祉施設へ贈呈



全国ジャージー大会（酪大体育館）



牧草草地演習

○昭和60年9月

国際草地学会が京都で開催され、第二牧場を見学

○昭和60年10月

創立二十周年協賛事業として、「川上・八束小学生「二日酪大体験入学」を実施





# 校外講師一覽表

氏名	講義科目	講義期間	所屬	摘要
永友繁雄	農業経営学	昭和41年	岡山大学	
福田稔	“	昭和41年～45年	“	
米田茂男	土壌学	昭和46年～47年 昭和47年～48年	“	
小松伊三郎	育種学	昭和41年～45年	“	
今村経明	乳畜産製造学	昭和41年～42年	“	
須藤浩	飼料作物学	昭和41年～48年	“	
下瀬昇	肥料学	昭和41年～47年	“	
三秋尚	飼料作物学	昭和41年～47年	“	
目瀬守男	農業経営学	昭和42年～現在	“	
中江利孝	乳学	昭和43年～現在	“	
河崎利夫	肥料学	昭和44年～現在	“	
羽渕統次郎	農業経営学	昭和44年	“	
河内知道	土壌学	昭和44年～現在	“	
内田仙二	飼料学	昭和49年～現在	“	
森次益三	肥料学	昭和50年	“	
稲本志良	農業経営学	昭和53年～56年	“	
片岡啓	畜産製造学	昭和53年～現在	“	
佐藤豊信	農業経済学	昭和57年～現在	“	
田口鎮雄	農業経営学	昭和41年～44年	鳥取大学	
尾崎繁	酪農施設学	昭和43年～現在	“	
石原昂	酪農機械	昭和54年～現在	“	



# 学科目担当講師名簿

昭和59年度後期  
昭和60年度前期

科目	講師名	職名
農業経営学	目瀬守男	岡山大学教授
農業経済学	佐藤豊信	〃 助教授
酪農経営	中山敏之	(財)中国四国酪農大学校教務課長
農業簿記	斉藤俊之	〃 総務部長
畜産概論	石田正之	〃 校長
飼料学	内田仙二	岡山大学教授
牧草草地	権代将人	(財)中国四国酪農大学校第二牧場技師
飼料作物	山本康廣	〃
家畜改良	重近文男	〃 教育部長
家畜繁殖	森本博之	〃 第一牧場長
飼養管理 I	草苺耕造	〃 第二牧場長
飼養管理 II	野口竜三	〃 第一牧場技師
家畜衛生	石原健	〃 次長
解剖生理	馬場誠	〃 教務課技師
土壌学	河内知道	岡山大学助教授
肥料学	河崎利夫	〃 教授
乳学	中江利孝	〃 教授
畜産製造学	片岡啓	〃 助教授
酪農施設学	尾崎繁	鳥取大学助教授

科目	講師名	職名
酪農機械	石原昂	鳥取大学教授
農業土木	谷本英雄	県立勝山技術訓練センター主幹
〃	石井美義	〃 主任
特別講義		
私の酪農経営	水島長	酪農家(勝田郡奈義町上町川)
酪農の現状と将来	堤兼利	岡山県農林部畜産課長
交通道德について	水嶋偉晴	岡山県勝山警察署交通課長
マイコンによる飼料計算	高山浩二	ホクラク農協改良課
牛群検定と乳牛改良	永井仁	(社)家畜改良事業団岡山種雄牛センター
牛の受精卵移植について	岡田耕平	岡山県津山家畜保健衛生所主任
乳製品加工の実際	額田和敬	岡山県酪農試験場技師
畜産金融	井上吏	岡山県農林部畜産課主任

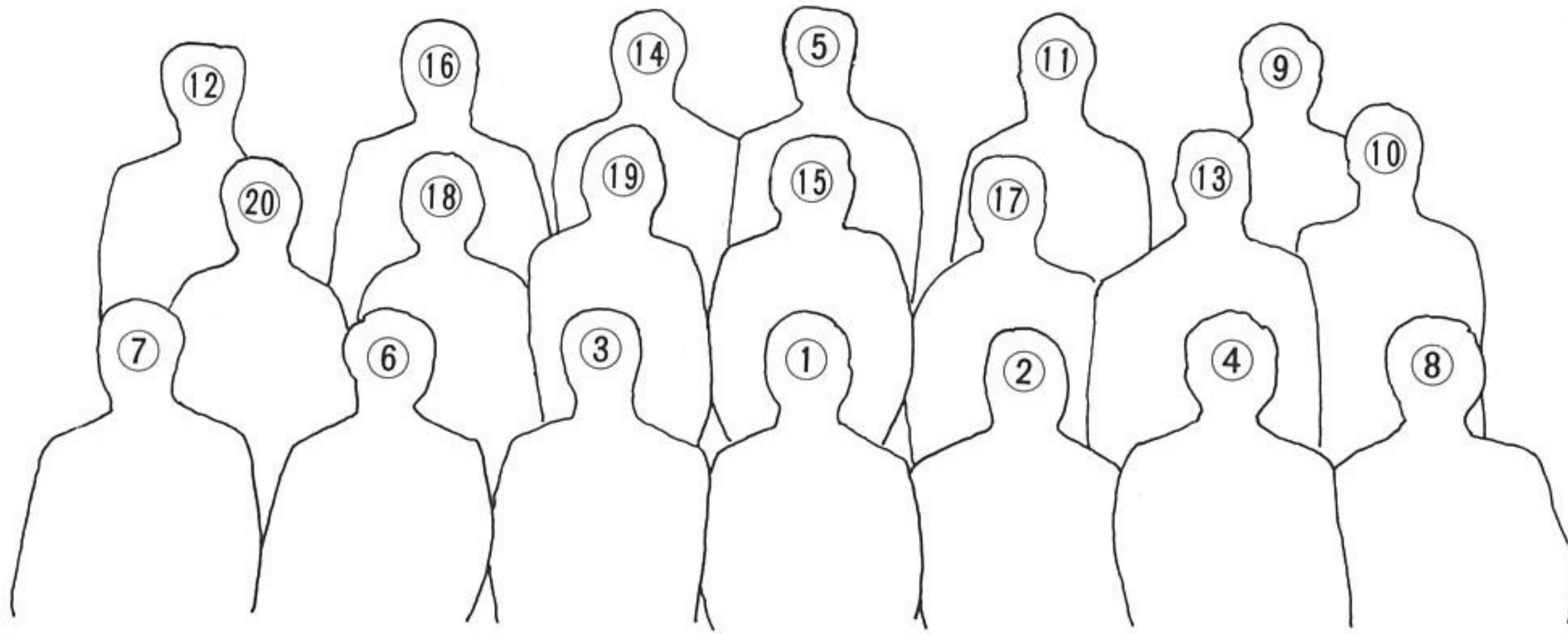




# 現 職 員

氏名	勤務期間	職名	現住所	備考
① 石田 正之	46・4 / 48・3	教務課長補佐	岡山県真庭郡川上村西茅部六三二	
② 石原 健	59・3 / 現在	校長		
③ 斉藤 俊之	48・4 / 49・3	教務課長		
④ 重近 文男	58・4 / 現在	次長		
⑤ 渡部 哲矢	41・4 / 46・3	長第二牧場		
⑥ 中山 敏之	60・4 / 現在	校長		
⑦ 草苺 耕造	60・4 / 現在	長第一牧場		
⑧ 森本 博之	59・4 / 現在	長第一牧場		
⑨ 野口 竜三	58・4 / 59・3	長第一牧場		
⑩ 権代 将人	60・4 / 現在	技師第一牧場	岡山県真庭郡川上村上福田一二〇五―七〇	
⑪ 山本 康廣	60・4 / 現在	技師第二牧場	岡山県真庭郡川上村西茅部六三二	
⑫ 馬場 誠	58・4 / 現在	師教務課技		
	60・4 / 現在	師教務課技		旧姓 高森





氏名	勤務期間	職名	現住所	備考
③ 三牧 孝徳	43・4 現在	第二牧場	岡山県真庭郡川上村下 徳山苗代一九〇六	
④ 磯田 博	51・4 現在	〃	岡山県真庭郡川上村西 茅部六三二	
⑤ 樋口 照夫	52・4 現在	第一牧場	岡山県真庭郡川上村西 茅部一六三	
⑥ 有富 勝仁	60・5 現在	第二牧場	岡山県真庭郡八束村富 掛田二六三	
⑦ 池田 富幸	54・1 現在	運転技術員	岡山県真庭郡川上村上 福田五五〇一	
⑧ 津田 清子	39・4 現在	総務課主事	岡山県真庭郡川上村東 茅部一二八二	
⑨ 道祖 夕カ	59・5 現在	調理員	岡山県真庭郡川上村上 福田八四三	
⑩ 樋口 保枝	59・5 現在	〃	岡山県真庭郡川上村西 茅部三九〇一	



# (財)中国四国酪農大ニ校創立20周年記念事業

## I、記念式典

一、日時 昭和六十年十一月八日(金)

二、場所 岡山県真庭郡川上村西茅部六三二

財団法人中国四国酪農大ニ校

## 三、記念行事

(1) 記念講演(十三時～十四時三〇分)

講師 茨城大ニ校助教授 田中利見先生

演題 「牛乳の消費拡大と酪農の将来について」

(2) 記念式典(十四時四十五分～)

① 開式

② 理事長あいさつ

③ 功勞者表彰

功勞者 美土路啓典、常守 実、戸田道子、

永年勤続 三牧孝徳、津田清子

感謝状 川上村

④ 来賓祝辞 中国四国農政局長、岡山県議会、農業団体代表(農協中央会会長)

⑤ 卒業生代表祝辞 第四期生 遠藤 祐史

⑥ 祝電披露

⑦ 受彰者代表謝辞 美土路啓典

⑧ 閉会あいさつ 校長 石田 正之

(3) 記念植樹

(4) 記念祝賀パーティー

## II、その他協賛事業

一、地元小学校一日酪農大ニ校体験入学(昭和六十年十月十五日)

二、創立20周年記念誌発行(昭和六十年十一月)



監修 校長 石田正之  
編集 教育部長 重近文男  
" 教務課長 中山敏之  
" 教務課技師 馬場誠

財団法人中国四国酪農大學校創立二十周年記念

## 二十年のあゆみ

印刷発行 昭和六十年十一月

編集発行 岡山県真庭郡川上村西茅部六三二  
(財)中国四国酪農大學校

電話 〇八六七(六六) 三六五一

印刷所 勝美印刷株式会社

鳥取県東伯郡羽合町長瀬